

二 こなひ内には偷盗あるあり外には山賊のむれ掠めざるあり二かれら心にわがその一切の悪をしたるめたるこ  
 三 さを思はず今その行爲はわれらに圍みふさぎて皆わが目前にあり三かれらはその悪をもて王を悦ばせその  
 四 詐詭をもてるく、の牧伯を悦ばせり四かれらはみな姦淫をおこなふ者にしてパンを作るものに焼るる燼の  
 五 ごさし埋粉をこねてその發酵さきまでしばらく火をおこすことをせざるのみなり五われらの王の日にもろも  
 六 ろの牧伯は酒の熱によりて 疾し王は嘲けるものさきもに手を伸ぶ六かれら伏伺するほどに心を燼のごさく  
 七 して備をなすそのパンを焼くものは終夜れむりにつき朝におよばばまた燼のごさく燃ゆ七かれらはみな燼  
 八 エエフライムは異邦人にいりまじるエフライムはかへさざる餅餅となれり九かれは他邦人らにその力を  
 九 のまるれども之をしらす自髪その身に雜り生れどもこれをささらす十イスラエルの驕傲はその面にむかひて  
 十 証をなすかれらは此もろく、の事あれどもその神エホバに歸ることをせず又もさむることをせざるなり 十一  
 十一 エフライムは智慧なくして愚なる鶴のごさし彼等はエジプトにむかひて呼求めまたアツスリヤに往く 十二 我  
 十二 かれらの往ききわが網をその上にはりて天空の鳥のごさくに引墮し前にその公會に告しごさくかれらに懲  
 十三 しめん 十三 禍なるかなかれらは我をばなれて迷ひいでたり敗壞かれらに來らんかれらは我にむかひて罪を  
 十四 をかしたり 我かれらを贖はんさおもへどもかれら我にさむらひて 謊言をいへり 十四 かれら誠心をもちて我を  
 十五 よばず唯牀にありて哀しみ號べりかれらは穀物とあたらしき酒のゆゑをもて相集りかつわれに逆ふ 十五 我  
 十六 かれらを教へその腕をつよくせしごさく彼らは我にもさりて悪しきことを謀る 十六 かれらは歸るされども  
 至高者にかへらす彼らはたのみがたき弓のごさし彼らのもろく、の牧伯はその舌のあらしき言によりて劍に  
 たふれん彼らは之がためにエジプトの國にて嘲笑をうくべし

第八章一 ラツバをなんちの口にあてよ敵は驚のごさくエホバの家にのぞめりこの民わが契約をやぶりわが  
 律法を犯しよによる二かれら我にむかひてわが神よわれらイスラエルはなんちを知れりよ叫ばん三イスラエ

四 ルは善なみきらへり敵これを追ん四かれら王をたてたり然れども我によりて立しにあらすかれら牧伯をた  
 てたり然れども我がしらするごさくなら彼らまたその金銀をもて己がために偶像をつくれりその造れるは毀  
 五 ちすてられんが爲にせしにごさくならす五サマリヤなんちの犢は忌きらふべきものなりわが怒りわれらにむか  
 六 ひて燃ゆかれら何れの時に罪なきにいたらん六この犢はイスラエルより出づ匠人のつくれる者にして神に  
 七 あらずサマリヤの犢はくたけて粉ごならん七彼らは風をまきて狂風をかりさらん種ごころは生長てる穀物な  
 八 くその穂はみのらざるべしごさくひ實るごも他邦人これを呑ん八イスラエルは既に呑れたり彼等いま列國の  
 九 中において悦ばれざる器のごさく視徹るごなり九彼らは獨ぬし野の驢馬のごさくアツスリヤにゆけりエフ  
 十 ライムは物を餓りて戀人を得たり十かれら列國の民に物を餓りたりご 雖も今われ彼等をつごへ集む彼らは  
 十一 諸侯伯の王に負せらるる重擔のために衰へ始めん 十二 エフライムは多くの祭壇を造りて罪を犯すこの祭  
 十二 壇はかれらが罪に陥る階ごはなれり 十三 我かれらのために律法をしるして數件の箇條を示したれご彼らは反  
 十三 て之を異物ごおもへり 十三 かれらは我に獻ふべき物を獻ふれごも只肉をそなへて己みづから之を食ふエ  
 十四 ホバは之を納たまはず今かれらの愆を記え彼らの罪を罰したまはん彼らはエジプトに歸るべし 十四 イスラエ  
 ルは己が 造主を忘れてもろく、の社廟を建てユダは塹をさりまはせる邑を多く増し加へたり然ごわれ火を  
 その邑々におくりて 諸の城を焼亡さん

第九章一 イスラエルよ異邦人のごさく喜びすさむ勿れなんち淫行をなして汝の神を離る汝すべての夢の  
 打場にて賜はる淫行の賞賜を愛せり二打場ご酒樽ごはかれらを養はし亦あたらしき酒もむなしくならん三  
 四 れらはエホバの地にさまますエフライムはエジプトに歸りアツスリヤにて汚穢たる物を食はん四彼等はエ  
 ホバにむかひて酒を灌ぐべき者にあらすその祭物はエホバの悦びたまふ所にあらすかれらの犠牲は喪に居  
 五 る者のパンのごさし凡てこれを食ふものは汚るべし彼等のパンは只おのが食ふためにのみ用ふべくしてエホ  
 六 バの家に入るべきにあらず五なんちら集會の日ごエホバの節會の日に何をなさんとするや六視よかれら滅亡



の故によりて去ゆきのエジプトかれらにあつめメンピスかれらを葬らん蒺藜かれらが銀の寶物を獲いばら  
 七 彼らの天幕に蔓らん七刑罰の日きたり應報の日きたれりイスラエルこれを知らん預言者は愚なる者靈に感  
 八 じたるものは狂へる者なり是なんちの悪おほく汝の怨恨おほいなるに因るハエフライムは我が神にならべて  
 九 他の神をも仰望めり預言者の一切の途は鳥を捕ふる者の網のごとく且その神の室の中にて怨恨を懐けり九  
 十 れらばギベアの目のごとく甚だしく悪しき事を行へりエホバはその悪を心に記めてその罪を罰したまはん  
 十一 在昔われイスラエルを見るこゝ荒野の葡萄のごとく汝らの先祖等を看るこゝ無花果の樹の始にむすべる最  
 十二 先の果のごとくなしに彼等はバアルベオルにゆきて身を恥辱にゆだねその愛する物ごとも憎むべき者  
 十三 はなれり 十二 エフライムの榮光は鳥のごとく飛ざらん即ち産ごとも孕むごとも妊娠ごともなかるべし 十二假  
 十四 令かれら子等を育つるこゝも我その子を喪ひて遣る人なきにいたらしめん我が離るる時かれらの禍大なる  
 十五 哉 十三 われエフライムを美地に植ゑてツロの如くなしよごもエフライムはその子等を携へいだして人を殺  
 十六 す者に付さんさす 十四 エホバは彼らに與へたまへ爾なにを與へんさしたまふや孕まざる胎乳なき乳房を  
 十七 與へ給へ 十五 彼らが凡ての悪はギルガルにあり此故に我がしにて之を惡めりその行爲あしはば我が家  
 十八 り逐いだし重れて愛することせしその牧伯等はみな愕れる者なり 十六 エフライムは撃れその根はかれて果  
 十九 を結ぶまじ若し産ごあらば我その胎なる愛しむ實を殺さん 十七 かれら聽従はざるによりて我が神これを  
 二十 棄たまふべしかれらは列國のうちに流離人ごならん  
 第十章 イスラエルは果をむすびて茂り榮える葡萄の樹その果の多くなるがまゝに祭壇をましその地の饒  
 一 なるがまゝに偶像を美しくせり二かれらは二心をいだけり今かれら罪せらるべし神はその祭壇を打毀らそ  
 二 の偶像を拆棄てたまはん三かれら今いふべし我儕神を畏れざりしに因りて我らに王なしこの王は我らのため  
 三 に何をかなさん四かれらは虚しき言をいだし偽の誓をなして約をたつ審判は畑の畝にもえいづる茵蔯の  
 四 五ごとし五サマリヤの居民はベテアベンの憤の故によりて戦慄かんその民ごこれを悦ぶ祭司等はその榮のうせ

六 たるが爲になげかん六 禮物はアツスリヤに携へられ禮物としてヤレブ王に獻げらるべしエフライムは蓋をか  
 七 八 七 むりイスラエルはあのが計議を恥ぢん七サマリヤは滅びその王は水のうへの木片のごとし八イスラエルの  
 九 罪なるアベンの崇邱は荒はてて荆棘と蒺藜その壇のうへには之茂らんその時かれら山にむかひて我等を  
 十 九 おほへ陵にむかひて我儕のうへに倒れよさいはん九イスラエルは汝はギベアの日より罪をなせり彼等はそ  
 十一 こに立り邪惡のひさぐを攻たりと戦争はギベアにてかれらに及ぼざりき十我思ふまゝに彼等をいましめん  
 十二 彼等その二の罪につながらん時もろくの民あつまりて之をせめん十一 エフライムは馴されたる牝牛のご  
 十三 くにして穀をふむごを好むされご我その美しき頸に物を負しむべし我エフライムに軛をかけんエタは耕し  
 十四 ヤコブは土塊をくだかん 十二 なんぢら義を生ずるために種をまき憐憫にしたがひてかりり又新地をひらけ  
 十五 今エホバを求むべき時なり終にはエホバきたりて義を雨のごとく汝等のうへに降せたまはん 十三 なんぢら  
 十六 は悪をたがへし不義を獲をさめ虚偽の果をくらへりこは汝おのれの途をたのみ己が勇士の數衆きをたのめる  
 十七 に縁る 十四 この故になんぢらの民の中に擾亂おこりて汝らの城はごごくく打破られんシヤルマンが戰鬥の  
 十八 日にベテアルベルを打破りしにこごならす母その子ごごもに碎かれたり 十五 なんぢらの大なる惡のゆゑによ  
 十九 りてベテアル如此なんぢらに行へるなりイスラエルの王はあしたに滅びん  
 第十一章 イスラエルの幼かりしとき我これを愛しぬ我わが子をエジプトより呼いだしたり二かれらは呼  
 一 二 るるに隨ひていよくその呼者に遠ざかり且もろくのバアルに犠牲をささげ雕たる偶像に香を焚けり三我  
 三 エフライムに歩むごを教へ彼等をわが腕にのせて抱けり然ごかれらは我にいやされたるを知らず四われ人  
 四 にもちぬる索すなはち愛のつなをもて彼等をひけり我がかれらを待ふは軛をその腰より擧ぐるものご  
 五 くにして彼等に食物をあたへたり五かれらはエジプトの地にかへらじ然ごかれらエホバに歸らざるにより  
 六 てアツスリヤ人その王ごならん六 劍かれらの諸邑にまはりゆきてその關門をこぼら彼らなその謀計  
 七 の故によりて滅さん七わが民はごもすれば我にはなれんごする心あり人これを招きて上に在るものに屬し



八 めんごすれども身をなすもの一人だになしエフライムよ我いつて汝をすてんやイスラエルよ我いつて汝  
 をわたさんや我いつて汝をアデマのごとくせんや争でなんぢをせホイムのごとく爲んやわが心わが裏にかは  
 九 りて我の愛憐ごさんく燃ふこれり九我わが烈しき震怒をほごすごをせし我かされてエフライムを滅す  
 十 こをせし我は人にあらす神なればなり我は汝のうちにいます 聖者なりいかりをもて臨まじナかれら  
 十一 獅子の吼ゆるごとくに聲を出し給ふエホバに隨ひて歩まんエホバ聲を出したまへば子等は西より急き來らん  
 十二 べし是エホバの聖言なり 十二エフライムは謊言をもてイスラエルの家は詐偽をもて我を圍めりユダは神さ  
 信ある聖者ごに屬みつみ深湯をれり

一 第十二章 エフライムは風をくらひ東風をおひ日々詐偽と暴逆を增くはへアツスリヤと契約を結び油  
 二 をエジプトに餽れりニエホバはユダと争辨をなしたまふヤコブをその途にしたがひて罰しその行爲にしたが  
 三 ひて報いたまふ三ヤコブは胎におし時その兄弟の踵をさらへまた己が力をもて神と角力あらそへり四  
 四 は天の使さ角力あらそひて勝ち泣きて之に恩を求めたり彼はベテルにて神にあへり其處にて神われらに語ひ  
 五 給へり五これは萬軍の神エホバなりエホバは其記念の名なり六然ばなんぢの神にかへり矜恤と公義をま  
 七 もり恒になんぢの神を仰ぐべし七彼はカナン人(商賈)なり其手に詭詐の權衡をもち好んであざむき取ご  
 八 をなすエフライムはいふ誠にわれは富る者ごなれり我は身に財寶をえたり凡てわが勞したるごの中に罪  
 九 をうべき不義を見いだす者なかるべし九我エホバはエジプトの國をいでしより以來なんぢらの神なり我いま  
 十 も尙なんぢを幕屋にすまはせて節會の日のごとくならしめんナ我もろくの預言者にかたり又これに益々  
 十一 ほく異象をしめしたり我もろくの預言者に托して譬喩をまうく 十一ギレアデは不義なる者ならずや彼らは  
 十二 全く虚し彼らはギルガルにて牛を犠牲に獻ぐかれらの祭壇は團の敵につみたる石の如し 十二ヤコブはアラ  
 十三 ムの野にげゆけりイスラエルは妻を得んために人に事へ妻を得んために羊を牧り 十三エホバ一人の預言者

十四 をもてイスラエルをエジプトより導きいだし一人の預言者をもて之を護りたまへり 十四エフライムは怒を激  
 ふるご極めて甚だしその主われを流し血をわれが上にごめその恥辱をわれに歸せたまはん  
 一 第十三章 エフライム言を出せば人をのけり彼はイスラエルのなかに己をたがうしバアルにより罪を  
 二 犯して死たりしが 二今も尙ますく罪を犯しその銀をもて己のために像を鑄その機巧にしたがひて偶像を作  
 三 る是みな工人の作なるなり彼らは之につきていふ犠牲を獻ぐる者はこの積に吻を接べしご三是によりて彼ら  
 四 は朝の雲のごとく速にきえうする露のごとく打場より大風に吹散さるる穀殻のごとく窓より出ゆく煙のご  
 五 くらん四されご我はエジプトの國をいでてより以來なんぢの神エホバなり爾われの外に神を知るごなし  
 六 我の外に救者なし五我さきに荒野にて水なき地にて爾を顧みたり六彼らは秣場によりて食に飽き飽くに  
 七 ぶりてその心たがふり是によりて我を忘れたり七斯るがゆゑに我われらに對ひて獅子のごとくなり途の傍に  
 八 ひそみうかがふ豹のごとくならん八われ子をうしなへる熊のごとく彼らに向ひてその心膜を裂き獅子のご  
 九 くこれを食はん野の獸これを攔断るべし九イスラエルよ汝の滅ぶるは我に背き汝を助くる者に背くが故なり  
 十 汝のもろくの邑に汝を助ぐべき汝の王は今いづくにかあるなんぢらごその王ご牧伯等ごを我に與へよご  
 十一 言たりし士師等は今いづくにあるか 十一われ忿怒をもて汝に王を與へ憤恨をもて之を奪ひたり 十二エフ  
 十二 ライムの不義は包まれてありその罪はをさめたくはへられたり 十三 劬勞にかゝれる婦のみなしみに臨  
 十三 まん彼は愚なる子なり時に臨みてもなほ産門に入らず 十四 我われらを陰府の手より贖はん我われらを死より  
 十四 贖はん死よなんぢの疫は何處にあるか 陰府よ汝の災は何處にあるか 悔改はかくれて我が目にみえず  
 十五 彼は兄弟のなかにて果を結ぶご多けれごも東風吹きたりエホバの息荒野より吹おこらんごのため  
 十六 にその泉は乾その源は涸れんその積蓄へたるもろくの貴き器皿は掠め奪はるべし 十六サマリヤはその  
 神にそむきたれば刑せられ劍に斃れんその嬰兒はなげくたかれその孕みたる婦は割れん  
 第十四章 エフラエルよ汝の神エホバに歸れ汝は不義のために仆れたり 二汝ら言詞をたづさへ來りエホ



三 巴に歸りていへ諸の不義に赦して善きこるを受納れ給へ斯て我らは唇をもて牛のごまくに汝に獻げん  
 アッスリヤはわれらを援けし我らは馬に騎らじ又ふたたび我等みづからの手にて作れる者に向ひわが神なり  
 四 と言はじ孤兒は爾によりて憐憫を得べければなりき我われらの反逆を醫し悦びて之を愛せん我が怒は彼を  
 五 離れ去りたり五我イスラエルに對しては露の如くならん彼は百合花のごまき花さきレバノンのごまき根をば  
 六 らん六その枝は茂りひるがり其美麗は橄欖の樹のごまきその芬芳はレバノンの如くならん七その蔭に  
 七 住む者かへり來らんかれらは穀物の如く活かへり葡萄の樹のごまき花さきその馨香はレバノンの酒のごま  
 八 くなるべし八エフライムはいふ我また偶像と何のあづかる所あらんやと我これに應へたり我われを顧みん我  
 九 は蒼翠の松のごまき汝われより果を得ん九誰か智慧ある者そその人はこの事を曉らん誰か頓悟ある者そその  
 十 人は之を知らんエホバの道は凡て直し義者は之を歩む然と罪人は之に躓かん

二 第一章 エホバの子ヨエルに臨めるエホバの言二老たる人よ汝らは是を聴けすべて此地に住む者汝ら耳  
 三 を傾けよ汝らの世或は汝らの先祖の世にも是のごまき事ありしや三汝ら之を子に語り子はまた之をその子  
 四 に語りその子之を後の代に語りつたへよ四蝗虫のくらす所となりそ  
 五 遺せる者はなめつくす蝗虫のくらす所となりそ遺せる者は喫はるばす蝗虫の食ふ所となりそ  
 六 遺せる者はなめつくす蝗虫のくらす所となりそ遺せる者は喫はるばす蝗虫の食ふ所となりそ  
 七 はごまなる民わが國に攻めすればなりその勢強くその數はかられずその齒は獅子の齒のごまきその牙は牝  
 八 獅子の牙のごまき七彼等わが葡萄の樹を荒しわが無花果の樹を折りその皮をばさばだかにして之を棄つその  
 九 枝白くなれり八汝ら哀哭かなしめ貞女その若かりしききの夫のゆゑに麻布を腰にまさひて哀哭かなしむが  
 十 ごまごせよ九素祭灌祭ともにエホバの家に絶えエホバに事ふる祭司等哀傷をなす十田は荒れ地は哀傷む是  
 十一 穀物荒はて新しき酒つき油たえんごまきすればなり十一むぎ大麥の故をもて農夫羞ぢよ葡萄つくり哭けよ田  
 十二 の禾稼うせばてたればなり十二葡萄の樹は枯れ無花果の樹は萎れ石榴椰子林檎および野の諸の樹は凋みたり  
 十三 是をもて世の人の喜樂かれうせの十三祭司よ汝ら麻布を腰にまさひて哭かなしめ祭壇に事ふる者よ汝らなき  
 十四 さげべ神に事ふる者よなんぢら來り麻布をまさひて夜をすこせ其は素祭も灌祭も汝らの神の家に入こ  
 十五 あらざればなり十四汝ら斷食を定め集會を設け長老等を集め國の居民をこまきく汝らの神エホバの家に  
 十六 集めエホバにむかひて號呼れよ十五あそその日は禍なるかなエホバの日近く暴風のごまきには全能者より  
 十七 來らん十六我らがまのあたりに食物絶えしにあらすや我らの神の家に歡喜と快樂絶えしにあらすや十七種は  
 十八 土の下に朽ち倉は壞れ廩は圯るそは穀物ほるばされたればなり十八いかに畜獸は哀しみ鳴くや牛の群は亂  
 十九 れ迷ふ草なければなり羊の群もまた死喪ん十九エホバよ我なんぢに向ひて呼ばらん荒野の諸の草は火にて  
 二十 焼け野の諸の樹は火焰にて焼盡ればなり二十野の獸もまた汝にむかひて呼ばらん其は水の流涸ればて荒野



の草火にてつけつくればなり  
 第二章 汝らシオンにて喇叭を吹け我聖山にて音高く之を吹鳴らせ國の民みな慄ひわなすかんそはエホバの  
 二 日のきたらんさすればなりすてに近づけりこの日は黒くをぐらき日雲むらがるまぐらき日にしてしのよ  
 の山々にたなびくが如し數おほく勢さひんなる民むれいたらんかふる者はいにしへよりありしこなき  
 三 後の代々の年にもあるこなきなるべし三火彼らの前を焚き火焔かれらの後にもゆその過ぎざる前は地エデン  
 の如くその過ぎしのちは荒はてたる野の如し此をのがれうるもの一としてあるこなきし四彼らの状は馬の  
 四 たちのごころ其馳ありくごころは軍馬のごころし五その山の嶺にさびをざる音は車の轟くがごころしまた火の  
 五 稗株をやくおさのごころしてその様強き民の行伍をたてて戦陣にのぞむに似たり六そのむかふごころ諸民  
 六 戦慄きその面みな色を失ふ七彼らは勇士の如くに趨あるき軍人のごころに石垣に攀のぼる彼ら各おの  
 七 道を進みゆきてその列を亂さず八彼ら互に推あはす各その道にしたがひて進み行く彼らは刃に觸るも身  
 八 を害はず九彼らは邑をわけめぐり石垣の上へ奔り家に攀登り盜賊のごころに窓より入る十そのむかふごころ  
 九 地ゆるぎ天震ひ日も月も暗くなり星その光明を失ふ十一エホバその軍勢の前にて聲をあげたまふ其軍旅は  
 十 なただ大なればなり其言を爲さぐる者は強しエホバの日は大にして甚だ畏るべきが故に誰かこれに耐ふる  
 十一 ことを得んや十二然しエホバ言たまふ今にても汝ら斷食と哭泣と悲哀をなし心をつくして我に歸れ  
 十二 汝ら衣を裂すして心を裂き汝等の神エホバに歸るべし彼は恩恵あり憐憫ありかつ怒ることゆるく愛  
 十三 憐大にして災害をなすを悔い給ふなり十四誰か彼のあるひは立歸り悔て祝福をその後にさめのごころ汝ら  
 十四 して素祭と灌祭をなんぢらの神エホバにさしめ給はせしめ知らんや十五汝らシオンにて喇叭を吹きなら  
 十五 し斷食を定め公會をよびつごへ十六民を集めその會を潔くし老たる人をあつめ孩童と乳哺子を集め新耶を  
 十六 その室より呼いだし新婦をその密室より呼いだせ十七而してエホバに事ふる祭司等は廊と祭壇の間にて泣  
 十七 て言へエホバよ汝の民を救したまへ汝の産業を恥辱しめらるるに任せ之を異邦人に治めさす勿れ何ぞ異

十八 邦人をして彼らの神は何處にあると言しむべけんや十八然せばエホバ己の地のために嫉妬を起しその民を  
 十九 憐みたまはん十九エホバ應へてその民に言たまはん視よ我穀物とあたらしき酒と油を汝におくる汝ら之  
 二十 に飽かん我なんぢらをして重て異邦人の中に恥辱を蒙らしめじ二十北よりきたる軍を遠く汝らより離  
 二十一 臭騰らん是大なる事を爲たるに因る二地を懼る勿れ喜び樂しめエホバ大なる事を行ひたまふな  
 二十二 リ三野の獸を懼る勿れあれ野の牧草はもえいで樹は果を結び無花果樹葡萄樹はその力をめさすなり二三  
 二十三 シオンの子等よ汝らの神エホバによりて樂しめ喜べエホバは秋の雨を適當なんぢらに賜ひまた前のごころ秋  
 二十四 の雨と春の雨とを汝らの上に降らせ給ふ二四打場には穀物益ち糞にはあたらしき酒と油溢れん二五我ら汝  
 二十五 らに遣し大軍すなはち群ゆる蝗なめつくす蝗喫ほるばす蝗噬くらふ蝗の蝕あらせる年を我汝らに  
 二十六 賠はん二六汝らは食ひ食ひて飽きよのつねならすなんぢらに待ひたまひし汝らの神エホバの名をほめ頌  
 二十七 へん我民はごころしへに辱しめらるるごころなきべし二七かくて汝らはイスラエルの中に我が居るを知り汝ら  
 二十八 の神エホバは我のみにて外に無きことを知らん我民は永遠に辱しめらるるごころなきべし二八その後われ吾  
 二十九 靈を一切の人に注かん汝らの男子女子は預言せん汝らの老いたる人は夢を見汝らの少き人は異象を見ん二九  
 三十 その日我またわが靈を僕婢に注かん三十また天と地に徴證を顯さん即ち血あり火あり煙の柱あるべし  
 三十一 エホバの大なる畏るべき日の來らん前に日は暗く月は血に變らん三二凡てエホバの名を顛ぶ者は救はる  
 三二 べしそはエホバの宣ひし如くシオンの山とエルサレムとに救はれし者あるべければなり其遣れる者の中にエ  
 三三 ホバの召し給へるものあらん  
 第三章 視よ我ユダとエルサレムの俘囚人を歸さんその日その時二萬國の民を集め之を携へてヨシヤパテ  
 の谷にくだりかしこにて我民我ゆづりの産なるイスラエルのために彼らをさばかん彼らこれを國々に散し  
 てその地を分ち取り取りたればなり三彼らは籤をひきて我民を取り童子を娼妓に換へ童女を賣り酒に換へ飲り



四 ツロシドムよりシテのすべての國よ汝ら我々何のさしはりあらんや汝ら我がなしきことに返をなさんさ  
 五 するや若し我に返報をなさんさならば我忽ち迅速に汝らがなしきことをもてその首に歸らしめん五是は汝  
 六 らは我の金銀を取り我のしたふべき寶を汝らの宮にたづさへゆき六またユダの人とエルサレムの人をギリ  
 七 シヤ人に賣りてその本國より遠く離らせられたればなり七視よ我われらを起して汝らが賣たる處より出し汝ら  
 八 なしきことをもてその首にへらしめん八我はなんぢらの男子女子をユダの人の手に賣り彼らに之を遠き民  
 九 なるシバ人に賣らんエホバこれを言ふ九もろくの國に宣つたへよ戦争の準備を爲し勇士をばげまし軍人  
 十 をこころよくくちより來らしめよ十汝等の鋤を劍に打かへ汝らの鎌を鎗に打かへよ弱き者も我は強しと言へ  
 十一 四周の國々の民よ汝ら急ぎ上りて集れエホバよ汝の勇士をかしこに降したまへ十二國々の民よ起て上り  
 十三 自シヤパテの谷に至れ彼處に我座をしめて四周の國々の民をこころよくく鞠かん十三鎌をいれよ穀物は熟せり  
 十四 來り踏めよ酒樽は溢ち糞は溢ち彼らの惡大なればなり十四かまびすしきかな無数の民審判の谷にありて  
 十五 まびすしエホバの目審判の谷に近づくが故なり十五日も月も暗くなり星その光明を失ふ十六エホバシオンよ  
 十七 りよびさむるかしエルサレムより聲をばなち天地を震ひうごしたまふ然れどエホバはその民の避所イス  
 十八 ラエルの子孫の城となりたまはん十七かくて汝ら我はエホバ汝等の神にして我聖山シオンに住むことをし  
 十九 るべしエルサレムは聖き所なり他國の人は重ねてその中をかよふまじ十八その日山にあたらしき酒滴り  
 二十 岡に乳流れユダのもろくの河に水流れエホバの家より泉水流れいでてシッテムの谷に灌かん十九エシブト  
 二十一 は荒すたれエドムは荒野ならん是はかれらユダの子孫を虐げ幸なき者の血をその國に流したればなり二十  
 二十二 されどユダは永久にすまひエルサレムは世々に保たん 二二我さきにはかれらが流し血の罪を報いざりしが  
 今はこのをむくいんエホバシオンに住みたまはん

ヨエル書 終

アモス書

第一章 テコアの牧者の中なるアモスの言 是はユダの王ウツヤの世 イスラエルの王ヨアシの子ヤラベ  
 一 アムの世地震の二年前に彼が見されたる者にてイスラエルの事を論るなり其言に云く二エホバシオンより  
 二 呼號りエルサレムより聲を出したまふ 牧者の牧場は哀き カルメルの上は枯る三エホバかく言たまふ  
 三 マスコは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らは鐵の打禾車をもてギレアデを打  
 四 り我ハザエルの家に火を遣りベネハダテの宮殿を焚ん五我々マスコの關を碎きアベンの谷の中よりそ  
 五 居民を絶のぞきベテエテンの中より王の杖を執る者を絶のぞかんスリアの民は擄へられてキルにゆかんエホ  
 六 バこれを言ふ六エホバかく言たまふガザは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼ら  
 七 は俘囚をこころよく曳ゆきてこれをエドムに付せり七我がガザの石垣の内に火を遣り一切の殿を焚ん八我アシ  
 八 ドドの中よりその居民を絶のぞきアシタロンの中より王の杖を執る者を絶除かん我また手を反してエタロン  
 九 を撃んベリシテ人の遣れる者亡ぶべし主エホバこれを言ふ九エホバかく言たまふ少口は三の罪あり四  
 十 罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らは俘囚をこころよくエドムに付した 兄弟の契約を忘れた  
 十一 り十我ツロの石垣の内に火を遣り一切の殿を焚ん十一エホバかく言たまふエドムは三の罪あり四の罪あ  
 十二 りば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼は劍をもてその 兄弟を追ひ全く憐憫の情を断ち恒に怒りて人を  
 十三 害し永くその 憤恨をたくはへたり 十二我テマンに火を遣りボヅラの一切の殿を焚ん十三エホバかく言た  
 十四 まふアンモンの人々は三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らはその國境を廣め  
 十五 んさてギレアデの孕める婦を割きたり 十四我ラバの石垣の内に火を放ちその一切の殿を焚ん是は戰鬪の日に  
 呻吟の聲をもて爲れ暴風の日に旋風をもて爲れん 十五彼らの王はその牧伯等と諸共に擄へられて往かんエ  
 十六 ホバこれを言ふ

第二章

アモス書 第一章

自一至二章一節

第二章 エホバかく言たまふ モアブは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼はエ



二 ドムの王の骨を焼く灰となせり。我モアブに火を遣りケリオテの一切の殿を焚ん。モアブは躁擾を喚喊の聲  
 三 さ喇叭の音の中に死ん。我その中より審判長を絶除きその諸の牧伯を之に殺さん。エホバこれを言ふ  
 四 ○四エホバが言たまふユダは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して救さじ。即ち彼らはエホバの律  
 五 法を輕んじその法度を守らずその先祖等が從ひし偽の物に惑はざる。五我ユダに火を遣りエルサレムの諸  
 六 の殿を焚ん。六エホバが言たまふイスラエルは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して救さじ。即ち  
 七 彼らは義者を金の爲に賣り貧者を鞋一足のために賣る。七彼らは弱き者の頭に地の塵のあらんこと  
 八 を喘ぎて求め柔かき者の道を曲げ又父子共に一人の女子に行きて我聖名を汚す。八彼らは質に取れる衣服を  
 九 一切の壇の傍に敷てその上に偃し罰金をもて得たる酒をその神の家に飲む。九嚮に我はアモリ人を彼らの前  
 十 に絶たりアモリ人はその高きこと香柏のごとくその強きこと橡の樹のごとくなりしが我その上の果さ下の根  
 十一 さをほろぼしたり。十我は汝らをエジプトの地より携へるのほり四十年のあひだ荒野において汝らを導き終  
 十二 にアモリ人の地を汝らに獲せたり。十二我は汝らの子等の中より預言者を興し汝らの少者の中よりナザレ  
 十三 人を興したりイスラエルの子孫よ然るにあらずやエホバこれを言ふ。十三然るに汝らはナザレ人に酒を飲ませ  
 十四 預言者に命じて預言する勿れ。十三視よ我麥束を積滿せる車の物を壓するがごとく汝らを壓せん。十四  
 十五 その時は疾走者も逃ぐるに暇あらず強き者もその力を施すを得ず勇士も己の生命を救ふこと能はず。十五弓  
 十六 を執る者も立こたを得ず足駛の者も自ら救ふ能はず馬に騎れる者も己の生命を救ふこと能はず。十六勇士の中  
 十七 の心剛き者もその日には裸にて逃げん。エホバこれを言ふ。

第三章 イスラエルの子孫よエホバが汝らにむかひて言さるる我がエジプトの地より導き上りし全家にむ  
 一 ひて言さるる此言を聴け。二地の諸の族の中にて我た汝ら而已を知れり。此故に我なんぢらの諸  
 二 の罪のために汝らを罰せん。三二人も相會せずば争て共に歩かんや。四獅子もし獲物あらずば豈林の中に  
 三 吼んや。猛き獅子もし物を攫まざるば豈その穴より聲を出さんや。五もし網の設なくば鳥めに地に張れる網にかゝ  
 四 らんや。網もし何の得る所も無くば豈地よりあがらんや。六邑にて喇叭を吹ひば民あざるか。ざらんや。邑に災禍の  
 五 起るはエホバのこれを降し給ふならずや。七夫主エホバはその隠れたる事をその僕なる預言者に傳へずしては  
 六 何事をも爲たまはざるなり。八獅子吼ひ誰懼れざらんや。主エホバ言語たまふ誰の預言せざらんや。九ア  
 七 シドドの一切の殿に傳へエジプトの地の一切の殿に宣て言へ。汝等サマリヤの山々に集りその中にある大な  
 八 る紛亂を觀その中間におこなはるる虐遇を觀よ。十エホバいひ給ふ彼らは正義をおこなふことを知らず。虐  
 九 げ取し物を奪ひたる物をその宮殿に積蓄ふ。十一是故に主エホバが言たまふ敵ありて此國を攻めこみ汝  
 十 の權力を汝より取下さん。汝の一切の殿は掠めらるべし。十二エホバが言たまふ牧羊者は獅子の口より羊の兩  
 十一 足あるひは片耳を取かへし得るのみサマリヤに於て床の隅またはダマスコ錫の榻に坐するイスラエルの子  
 十二 孫もその救はるることこの是のごとくならん。十三萬軍の神主エホバが言たまふ汝ら聽てヤコブの家に證せよ  
 十三 我イスラエルの諸の罪を罰する日にはベテルの壇を罰せん。其壇の角は折れて地に落つべし。十五我また  
 十四 冬の家および夏の家をうたん象牙の家はるび大きな家失せん。エホバこれを言ふ。

第四章 イスラエルの諸の罪を罰する日にはベテルの壇を罰せん。其壇の角は折れて地に落つべし。十五我また  
 一 又その主にむかひて此に持きたりて我らに飲せよ。言ふ。二主エホバ。己の聖を指し誓ひて云ふ。視よ。日汝らの  
 二 上に臨むその日には人汝らに釣かけ汝等の遺餘者を釣魚釣にかけて曳いたさん。三汝らは各その  
 三 前なる石垣の破壊たる處より奔出てハルモンに逃往ん。エホバこれを言ふ。四汝らベテルに往て罪を犯しギルガ  
 四 ルに往て益々おほく罪を犯せ。朝ごとに汝らの犧牲を携へゆけ。三日ごとに汝らの什一を携へゆけ。五酔い  
 五 れたる者を感じ謝祭に獻げ願意よりする。禮物を召てこれを告示せ。イスラエルの子孫よ。汝らは斯するを好  
 六 むなり。主エホバ言たまふ。六また我汝らの一切の邑に於て汝らの齒を清からしめ。汝らの一切の處において  
 七 汝らの食を乏しからしめたり。然るに汝らは我に歸らず。エホバ言たまふ。七また我收穫までには尙三月ある  
 八 に雨をさためて汝らに下さず。この邑には雨を降しこの邑には雨をふらさざりき。此田圃は雨を得ず。この田圃は雨



八 を得ずして枯れたり八二三の邑はひの一の邑に隠れしゆきて水を飲ぎも飽こさあたはず然るに汝らに我に  
 九 歸らすエホバ言たまふ九我枯死穀を朽腐穂をなめて汝等を撃なやませりまた汝らの衆多の園と葡萄園と  
 十 無花果の樹と橄欖の樹とは蝗これを食へり然るに汝らに我に歸らすエホバ言たまふ十我なんぢらの中にエ  
 十一 シプトに爲し如く疫病をもち一劍をもて汝らの少き人を殺し又汝らの馬を奪ひさり汝らの營の臭氣をして  
 十二 騰りて汝らの鼻を撲たしめたり然るも汝らに我に歸らすエホバ言たまふ十二我なんぢらの中の邑を滅す  
 十三 こさ下ドムゴモラを神の滅したまひし如くしたれば汝らは火焰の中より取いだしたる燃柴のごとくなれり  
 十四 然るも汝らに我に歸らすエホバ言たまふ十四イスラエル然らば我に汝らに我は我を汝らに行ふべ  
 十五 ればイスラエル汝の神に會ふ準備をせよ十三彼は即ち山を作りなし風を作り出し人の思想の如何なるをそ  
 十六 の人に示しまた晨光をさへて黑暗なし地の高處を踏む者なりその名を萬軍の神エホバといふ  
 十七 第五章 イスラエルの家よ我が汝らに對ひて宣る此言を聽け是は哀歎の歌なり二處女イスラエルは介れ  
 十八 て復起あがらず彼は己の地に扑倒さる之を扶け起す者なし三主エホバ言たまふイスラエルの家にお  
 十九 いては前に千人出たる邑は只百人のみの前に百人出たる邑は只十人のみの前に四エホバ言たまふイスラエ  
 二十 ルの家よ言たまふ汝ら我を求めよさらば生くべし五ペテルを求むるなけれギルガルに往なけれエ  
 二十一 ンに赴く勿れギルガルは必ず擄へられゆきペテルは無に歸せん六汝らエホバを求めよ然らば生くべし恐くはエ  
 二十二 ホバ火のごとくにヨセフの家に落くだりたまひてその火これを焼かんペテルのためにこれを熄す者一人もあ  
 二十三 らじ七汝ら公道を菌陳に變じ正義を地に擲つる者よ八昂宿および參宿を造り死の陸を變じて朝な晝を  
 二十四 暗くして夜さなし海の水を呼く地の面に溢れさる者よ九彼は滅亡を忽然強  
 二十五 者に臨ましむ滅亡つひに城に臨む十彼らは門にありて勸戒る者を惡み正直を言ふ者を忌嫌ふ十一汝らは貧し  
 二十六 き者を踐つけ麥の贖物を之より取る是故に汝らは鑿石の家を建てし雖もその中に住こあらじ美しき葡  
 二十七 萄園を作りし雖もその酒を飲こあらじ十二我知る汝らの愆は多く汝らの罪は大なり汝らは義しき者を

十三 虐げ賄賂を取り門において貧しきを推枉ぐ十三是故に今の時は賢者者黙す是惡き時なればなり十四汝ら善を  
 十四 求めよ惡を求めざれば汝ら生へしまた汝らが言こく萬軍の神エホバ汝らに儲に在さん十五汝ら惡を  
 十五 惡み善を愛し門にて公義を立萬軍の神エホバあるひはヨセフの遺れる者を憐み給はん十六この故に主たる  
 十六 萬軍の神エホバ言たまふ諸の街衢にて啼こさあらん諸の大路にて人哀しい哉哀しい哉と呼ん又農夫を呼  
 十七 きたりて哀哭しめ啼女を招きて啼しめん十七また諸の葡萄園にも啼こさ有べし其は我汝らの中通  
 十八 るべければなりエホバこれを言たまふ十八エホバの日を望む者は禍なるかな汝ら何さてエホバの日を望む  
 十九 や是は昏くして光りなし十九人獅子の前を逃れて熊に遇ひ又家にいりてその手を壁に附て蛇に咬るるに宛も  
 二十 似たり二十エホバの日は昏くして光なく暗にして糶なきに非ずや二一我は汝らの節筵を惡みかつ藐視む  
 二一 また汝らの集會を悦ばじ二三汝らに我に播祭または素祭を獻ぐるも我之を受納れじ汝らの肥たる犢の感謝  
 二二 祭は我これを顧みじ二三汝らの歌の聲を我前に絶て汝らの琴の音は我これを聽かじ二四公道を水のごとくに  
 二五 正義をつきさる河のごとくに流れしめよ二五イスラエルの家よ汝らは四十年荒野に居りし間犧牲と供物を  
 二六 我に獻げたりしや二六わへつて汝らは汝らの王シケテを貢ひ汝らの偶像キウンを貢へり是即ち汝らの神と  
 二七 する星にして汝らの自ら造り設けし者なり二七然らば我汝らにダマスゴの外に移さん萬軍の神とさなるエ  
 二八 ホバこれを言たまふ  
 第六章 一身を安くしてシオンに居る者思ひわづらはすしてサマリヤの山に居る者諸の國にて勝れたる國  
 二九 の中なる間高くしてイスラエルの家に就きたがはる者ば禍なるかな二カネに涉りゆき彼處より大  
 三十 ハマテに至りまたペリシテ人のガテに下りて視よ其等は此二國に愈るや彼らの土地は汝らの土地より大  
 三十一 るや三汝等は災禍の日をもて尙遠しと爲し強暴の座を近づけ四自ら象牙の牀に臥し寢臺の上に身を伸し群  
 三十二 の中より羔羊を取り圍の中より犢牛を取て食ひ五琴の音にあはせて唱ひ噪きダビテのごとくに樂器を製り出  
 三十三 し六犬聲をもて酒を飲み最も貴き膏を身に抹りヨセフの艱難を憂へざるなり七是故に今彼等は擄はれ



八 て伴 囚人の真先に立て往んかの身を伸したる者等の嘯の聲止むべし 八萬軍の神エホバ言たまふ 主エホバ  
 九 己を指て誓へり我ヤコブが誇る所の物を忌嫌ひその宮殿を惡む 我の邑さその中に充る者を付すべし 九  
 十 一の家に十人遣りたるも皆死ん十而してその親戚すなはち之を焚く者その死骸を家より運びいださんて  
 十一 之を取あげまたその家の奥に潜み居る者に向ひて他になほ汝ささもに居る者あるや言ふさき對へて一人も  
 十二 無しと言ん此時のの人また言べし 黙せよエホバの名を口に擧るること有べからず 十一 視よエホバ命を下し大  
 十三 なる家を撃て墟址さならしめ小き家を撃て微塵さならしめたまふ 十二 馬めに能く岩の上を走らんや人あに牛  
 十四 をもて岩を耕すことを得んや然るに汝らば公道を毒に變じ正義の果を茵陳に變じたり 十三 汝らば無物をよ  
 一 第七節 我等は自分の力を得しにあらすや言ふ 十四 是をもて萬軍の神エホバ言たまふイスラエル  
 二 の家よ我一の國を起して汝らに敵せしめん是はマテの入口よりアラバの川までも汝らななやまさん  
 三 第七節 主エホバの我に示したまへるは是の言の言 即ち草の再び生ずる時にあたりて彼蝗を造り  
 四 たまふその草は王の刈たる後に生じたるものなり 二 その蝗地の青物を食盡し後 我言り主エホバ願くは  
 五 赦したまへヤコブは少し争てか立ことを得ん 三 エホバその行へる事につきて悔をなし我これを爲さじと言  
 六 火大淵を焚きたる産業の地を焚ん 五 時に我言り主エホバ願くは止たまへヤコブは少し争てか立ことを  
 七 得ん 六 エホバその行へる事につきて悔をなし我これを爲さじ 主エホバ言たまふ 七 また我に示したまへる  
 八 さころ是の言の言 即ち準繩をもて築ける石垣の上にエホバ立ちその手に準繩を執たまふ 八 而してエホバ  
 九 我にむかひアモス 汝何を見るや言たまひければ準繩を見る 我答へしに主また言たまはく 我準繩を  
 十 我民イスラエルの中に設く我再び彼らを見過しにせし九 イサクの 崇邱は荒されイスラエルの 聖所  
 十一 是毀たれん我劍をもちてヤラベアムの家 起むはん 〇 十 時にベテルの祭司アマシャイスラエルの王ヤラ  
 十二 ベアムに言遣しけるはイスラエルの家の真 中にてアモス 汝に叛けり彼の 諸の言には此地も堪ふるあた

十一 はざるなり 十一 即ちアモス言りヤラベアムは劍によりて死んイスラエルは必ず擧へられて往きてその國  
 十二 を離れん 十二 而してアマシャアモスに言けるは 先見者よ汝往きてユダの地に逃れ彼處にて預言して汝  
 十三 の食物を得よ 十三 然るにベテルにては重れて預言すべからず 是は王の聖所 王の宮なればなり 十四 アモス對  
 十四 へてアマシャに言けるは 我は預言者にあらずまた預言者の子にも非ず 我は牧者なり桑の樹を作る者なり 二  
 十五 然るにエホバ 羊に従ふ所より我を取り往て我民イスラエルに預言せよ 三 エホバわれに宣へり 十六 今  
 十七 エホバの言を聽け 汝は言ふイスラエルにむかひて預言する勿れ イサクの家にむかひて言を出すな 十七  
 十八 是故にエホバ言く言たまふ 汝の妻は邑の申にて妓婦となり 汝の男子女子は劍に斃れ 汝の地は繩をもて分た  
 十九 れん 而して汝は穢れたる地に死んイスラエルは擧へられゆきてその國を離れん  
 二〇 第八章 主エホバの我に示したまへるは是の言の言 即ち 然したる 果物一筐あり 二 エホバわれにむ  
 二一 かひてアモス 汝何を見るや言たまひければ 熟したる 果物一筐を見る 三 答へしに エホバ我に言たまはく  
 二二 我民イスラエルの終いたれり 我ふたふび彼らを見過しにせし 三 主エホバ言たまふ 其日には 宮殿の歌は 哀哭  
 二三 に變らん 死屍おびたしくあり 人之を 遍き處に投棄てん 黙せよ 四 汝ら喘ぎて 食しき者に 迫り且地の 困難者  
 二四 を滅す者よ之を聽け 五 汝らば言ふ 月朔は何時過去らん 我等穀物を賣ん 六 安息日は何時過去らん 我ら  
 二五 麥倉を開かん 七 我らエホバを小くしシケルを大くし 僞の權衡をもて 欺く事をなし 六 銀をもて 賤しき者を買ひ  
 二六 鞋一足を 買ひて 貧しき者を買ひ 七 屑麥を賣出さん 七 エホバヤコブの 榮光を指て 誓ひて言たまふ 我かなら  
 二七 す 彼等の一切の行爲を 何時までも 忘れじ 八 之のため 地震はざらんや 地に住る者みな 哭かざらんや 地みな 河  
 二八 のごさく 噴あがらん 九 エジプトの河のごさく 湧あがり 又沈まん 九 主エホバ言たまふ 其日には 我日をして 眞晝に  
 二九 没せしめ 地をして 白晝に 暗くならしめ 十 汝らの 筈を 悲傷に 變らせ 汝らの 歌を 盡く 哀哭に 變らせ 一切の人  
 三十 に 麻布を 腰に 纏はしめ 一切の人に 頂を 剃しめ 其日を して 獨子を 喪へる 哀傷のごさく ならしめ 其終を して  
 三十一 て 苦き日のごさく ならしめん 十一 主エホバ言たまふ 視よ 日 至らん 汝ら 其時 我 饑饉を 此國に おくらん 是は 汝



十二 ンに乏しきに非ず水に渴くに非ずエホバの言を聽こざるの饑饉なり 十二 彼らは海より海とさまよひ歩き北より  
 十三 東に奔まはりてエホバの言を求めん然れど之を得ざるべし 十三 その日には美しき處女も少き男もともに渴のた  
 十四 めに絶いらん 十四 かのサマリヤの罪を指て誓ひダンよ汝の神は活きと言ひまたベエルシバの路は活くと語る  
 者等は必ず仆れん復興ることあらじ

一 第九章 我觀るに主壇の上に立て言たまはく柱の頭を撃ちて國を震はせ之を打碎きて一切の人の首に落  
 からしめよ其遺れる者をば我劍をもて殺さん彼らの逃る者も逃ほすることを得ず彼らの遁る者もたす  
 二 からじ 二 假令われら陰府に掘くだるさも我手をもて之を其處より曳いださん假令われら天に攀のぼるさも我  
 三 これを其處より曳ふるさん 三 假令われらカルメル山の巔に匿るごも我これを捜して其處より曳いださん  
 四 假令われら海の底に匿れて我目を逃るごも我蛇に命じて其處にて之を咬しめん 四 假令われらその敵に擄は  
 五 れゆくごも我劍に命じて其處にて之を殺さしめん我われらの上に我目を注ぎて災禍を降さん福社を降さん  
 六 主たる萬軍のエホバ地に捫れば地銜けその中に住む者みな哀しむ即ち全地は河のごごとくに噴あがりエジプ  
 七 下の河のごごとくにまた沈むなり 六 彼は樓閣を天に作り穹蒼の基を地の上に置るまた海の水を呼て地の面にこ  
 八 れを割ぐなり其名をエホバといふ 七 エホバ言たまふイスラエルの子孫よ我は汝らを視ここエテオピア人を視

九 導き來りしにあらすや 八 視よ我主エホバその目を此罪を犯すごころの國に注ぎ之を地の面より滅し絶たん但  
 十 し我はヤコブの家を盡くば滅さんエホバこれを言ふ 九 我すなはち命を下し篩にて物を篩ふがごとくイスラ  
 十一 エルの家を萬國の中にて篩はん一粒も地に落ちざるべし 十 我民の罪人即ち災禍われらに及ばす我らに降ら  
 十二 じま言をる者等は皆劍によりて死ん 十一 其日には我ダビデの倒れたる幕屋を興しその破壊を修繕ひその傾  
 十三 圯たるを興し古代の日のごごとくに之を建なほすべし 十二 而して彼らはエドムの遺餘者および我名をもて稱  
 十四 へらるご一切の民を獲ん此事を行ふエホバかく言なり 十三 エホバ言ふ視よ日いたらんさすその時には耕す

十五 者は刈者に相繼ぎ葡萄を踐む者は播種者に相繼がんまた山には酒滴り岡は皆餘て流れん 十四 我わが民  
 十六 イスラエルの俘囚を返さん彼らは荒たる邑々を建なほして其處に住み葡萄園を作りてその酒を飲み園園を  
 十七 作りてその果を食はん 十五 我われらその地に植つけん彼らは我がこれに與ふる地より重れて拔さらるご  
 十八 さあらじ 汝の神エホバこれを言ふ

十九 者は刈者に相繼ぎ葡萄を踐む者は播種者に相繼がんまた山には酒滴り岡は皆餘て流れん 十四 我わが民  
 二十 イスラエルの俘囚を返さん彼らは荒たる邑々を建なほして其處に住み葡萄園を作りてその酒を飲み園園を  
 二十一 作りてその果を食はん 十五 我われらその地に植つけん彼らは我がこれに與ふる地より重れて拔さらるご  
 二十二 さあらじ 汝の神エホバこれを言ふ



アモス書終

オバデヤ書

一 オバデヤの預言 主エホバエドムにつきて斯いひたまふ 我らエホバより出たる音信を聞き一人の使者國  
 二 國の民の中に遣されて云ふ起よ我等起てエドムを攻撃たんご 我汝をして國々の中において小き者たらし  
 三 む汝は 大に藐視めらるるなり 三山崖の巖屋に居り高き處に住む者よ汝の心の傲慢なんぢを欺けり 汝  
 四 心の中に謂ふ誰れ我を地に曳くだすこをを得んご 汝たごひ驚のこごくに高く擧り星の間に巢を造るごも我  
 五 そこより汝を曳くださんエホバこれを言たまふ 五盜賊汝に來り強盜夜なんぢに來り竊むごもその心に滿  
 六 つるごきは止めざらんや 嗚呼なんぢは滅されて絶ゆ 葡萄を摘む者汝にいたるも尙幾何を遺さざらんや  
 七 嗚呼エサウは捜されその隠しおける物は探りいださる 七汝と盟約を結べる人々はみな汝を國境に逐やり  
 八 汝と和好をなせる人々はみな汝を欺きて汝に勝ち汝の食物を食ふ者等は汝の下に網を設く 彼の中には  
 九 穎悟あらず エホバ言たまふ 當日には我智慧ある者をエドムより絶除き穎悟をエサウの山より絶除さざらん  
 十 ヤコブに暴虐を加へたるに因て恥辱なんぢを蒙はん 汝は永遠に至るまで絶るべし 十一 汝が遠く離れて立た  
 十二 りし日即ち異邦人これが財寶を奪ひ他國人これが門に進み入りエルサレムのために籤を擧たる日には汝  
 十三 も彼らの一人のこごくなりき 十二 汝は汝の兄弟の目すなはちその災禍の日を觀るべからず 又エダの子孫  
 十四 の滅亡の日を喜ぶべからずその苦難の日には汝の口を大きく開べからざるなり 十三 我民の滅ぶる日には汝  
 十五 その門に入らば其滅ぶる日には汝その患難を見べからず 又その滅ぶる日には汝その財寶に手をかく可ら  
 十六 ず 十四 汝路の辻々に立てその逃亡者を斬べからず其患難の日にこれが遺る者を付すべからず 十五 エホバの  
 十七 日萬國に臨むごこ瀾し汝の爲せるごこく汝も爲られ汝の應報なんぢの首に歸すべし 十六 汝等のわが聖山に  
 十八 て飲しごこく萬國の民も恒に飲ん即ちみな飲つ咬りて從前より有ざりし者のごこく成ん 十七 シオン山には  
 救はるる者等なりてその山聖所さならん またヤコブの家はその産業を獲ん 十八 ヤコブの家は火となりヨセ

オバデヤ書

自一至十八節



一 人の家は火燄となりエサウの家は藁ならん即ち彼等これが上に燃てこれを焚んエサウの家には遺る者一人  
 中九 も無にいたるべしエホバこれを言なり 十九南の人はエサウの山を獲平地の人はよりシテを獲ん又彼らは  
 二十 エフライムの地ちよびサマリヤの地を獲ニヤミンはギレアデを獲ん 二十かの擄はれゆきしイスラエルの軍  
 旅はカナン人に屬する地をザレパテまで取らんセパラテにあるエルサレムの俘擄人は南の邑々を獲ん 二  
 然る時に救者シオンの山に上りてエサウの山を鞠かん而して國はエホバに歸すべし

オバテヤ書 終

第一章 エホバの言アミタイの子ヨナに臨り、いはく二起ての 大なる邑ニネベに往き之を呼はり責  
 三 よそは其 惡わが前に上り來ればなりと三然るにヨナはエホバの面をさけてタルシシへ逃れんと起てヨツバ  
 四 まで其舟に乘れり 四時にエホバ大風を海の上に起し給ひて烈しき颪風海にありければ舟は幾んど破れんとせ  
 五 り五つよりししかば船夫怒れて 各おのれの神を呼び又舟を輕くせんさてその申なる載荷を海に投すたり  
 六 然るにヨナは舟の奥に下りて臥て酣睡せり六船長來りて彼に云けるは汝なんぞかく酣睡するや起きて汝  
 七 の神を呼べあるひは彼われらを脊顧て淪亡せらしめんぞ七つて人衆互に云けるは此災の我儕にの  
 八 ぞめるは誰の故なるかを知らんがため去來圖を掣んとやがて圖をひきしに圖ヨナに當りければ八みな彼に云け  
 九 るはこの災禍なにゆゑに我らにのぞめるか請ふ告げよ汝の業は何なるや何處より來れるや汝の國は何處  
 十 ぞや何處の民なるや九ヨナ彼等にいはひけるは我はヘブル人にして海を陸を造りたまひし天の神エホバを  
 十一 畏るる者なり十是に於て船夫甚だしく懼れて彼に云けるは汝なんぞその事をなせしやとその人々は彼が  
 十二 エホバの面をさけて逃れしなるを知れり其はさきにヨナ彼等に告げたればなり 十二遂に船夫彼にいひけ  
 十三 るは我儕のために海を靜にせんには汝に如何なすべきや 其は海いよく甚だしく狂蕩たればなり 十二ヨナ  
 十四 其は海われらにむかひていよく烈しく蕩たればなり 十四こゝにおいて彼等エホバに呼はりて曰けるはエホ  
 十五 ばよこひねがはくば此人の 命の爲に我儕を滅亡したまふ勿れ 又罪なきの血をわれらに歸したまふなわれ  
 十六 しかして海のあるところをみよ 十六かよりししかばその人々おほいにエホバを畏れエホバに犠牲を獻げ誓願

第一章 エホバの言アミタイの子ヨナに臨り、いはく二起ての 大なる邑ニネベに往き之を呼はり責  
 三 よそは其 惡わが前に上り來ればなりと三然るにヨナはエホバの面をさけてタルシシへ逃れんと起てヨツバ  
 四 まで其舟に乘れり 四時にエホバ大風を海の上に起し給ひて烈しき颪風海にありければ舟は幾んど破れんとせ  
 五 り五つよりししかば船夫怒れて 各おのれの神を呼び又舟を輕くせんさてその申なる載荷を海に投すたり  
 六 然るにヨナは舟の奥に下りて臥て酣睡せり六船長來りて彼に云けるは汝なんぞかく酣睡するや起きて汝  
 七 の神を呼べあるひは彼われらを脊顧て淪亡せらしめんぞ七つて人衆互に云けるは此災の我儕にの  
 八 ぞめるは誰の故なるかを知らんがため去來圖を掣んとやがて圖をひきしに圖ヨナに當りければ八みな彼に云け  
 九 るはこの災禍なにゆゑに我らにのぞめるか請ふ告げよ汝の業は何なるや何處より來れるや汝の國は何處  
 十 ぞや何處の民なるや九ヨナ彼等にいはひけるは我はヘブル人にして海を陸を造りたまひし天の神エホバを  
 十一 畏るる者なり十是に於て船夫甚だしく懼れて彼に云けるは汝なんぞその事をなせしやとその人々は彼が  
 十二 エホバの面をさけて逃れしなるを知れり其はさきにヨナ彼等に告げたればなり 十二遂に船夫彼にいひけ  
 十三 るは我儕のために海を靜にせんには汝に如何なすべきや 其は海いよく甚だしく狂蕩たればなり 十二ヨナ  
 十四 其は海われらにむかひていよく烈しく蕩たればなり 十四こゝにおいて彼等エホバに呼はりて曰けるはエホ  
 十五 ばよこひねがはくば此人の 命の爲に我儕を滅亡したまふ勿れ 又罪なきの血をわれらに歸したまふなわれ  
 十六 しかして海のあるところをみよ 十六かよりししかばその人々おほいにエホバを畏れエホバに犠牲を獻げ誓願



十七を立てたり 十七さてエホバすでに大なる魚を備へおきてヨナを吞ましめ給へりヨナは三日三夜魚の腹の中にありき

第二章 ヨナ魚の腹の中よりその神エホバに祈禱て二曰けるはわれ患難の中よりエホバを呼びしに彼われにこたへたまへりわれ陰府の腹の中より呼ばりしに汝わが聲を聴たまへり三汝われを淵のうち海の中に投げたれども復た汝の聖殿を望まん五水われを環りて魂にも及ばん六淵われをさりかこみ海草わが頭に纏へり六われ山の根基にまで下れり地の關木いつも我うしろにありき然るに我神エホバよ汝はわが命を深き穴より救ひあげたまへり七わが靈魂に弱りしとき我エホバをちもへり而してわが祈なんぢに至りなんぢの聖殿におよべり入いつぱりなる虚しき者に事ふるものは自己の恩たる者を棄つ九されど我は感謝の聲をもて汝に獻祭をなし又わが誓願をなんぢに償さん救はエホバより出るなりとエホバその魚に命じたまひければヨナを陸に吐いだせり

第三章 エホバの言ふたゞびヨナに臨めり曰く二起てかの大なる府ニネベに往きわが汝に命ずるころを宣ふ三ヨナすなはちエホバの言に循ひて起てニネベに往けりニネベは甚だ大なる邑にしてこれをめぐるに三日を歴る程なり四ヨナその邑に入り初一日路を行きつゝ呼ばり曰けるは四十日を歴ばニネベは滅亡さるべし五わが死しければニネベの人々神を信じ斷食を宣れ大なる者より小き者に至るまでみな麻布を衣たり六この言ニネベの王に聞えければ彼位より起ち朝服を脱ぎ麻布を身に纏ふて灰の中に坐せり七また王大臣ささもに命をくだしてニネベの中に宣しめて曰く人も畜も牛も羊もさもに何を味ふべからず又物を食ひ水を飲むべからず八人も畜も麻布をまきひ只管神に呼ばり且おのゝ其惡しき途および其手に作す邪惡を離るべし九或は神その聖旨をわへて悔い其烈しき怒を息めてわれらを滅亡さらん誰かその然らざるを知らんや十神われらの爲すところをいんがみ其あしき途を離るるを見そなはし彼等になさんと言ひし所の災禍を悔いて之をなしたまはざりき

第四章 ヨナこの事を甚だ惡しとして烈しく怒りニエホバに祈りて曰けるはエホバよ我なほ本國にありし時斯あらんと言ひしに非ずやさればこそ前にタルシシへ逃れたるなれ其は我なんぢは矜恤ある神憐憫あり怒るこそ遅く慈悲深くして災禍を悔い給ふものなりと知ればなり三エホバよ願くは今わが命を取りたまへ其は生るこそよよりも死るかた我に善ければなり四エホバ曰たまひけるは汝の怒る事いかで宜しからんや五ヨナは邑より出てその東の方に居り己が爲に其處に一の小屋をしつらひその陸の下に坐して府の如何に成行く

六かを見ろ六エホバ神を備へ之をして發生てヨナの上を覆はしめたり七ヨナは首の爲に庇蔭を設けてその憂を慰めんが爲なりきヨナはこの瓢の木によりて甚だ喜べり七されど神あくる日の夜明に虫をそなへて其ひさごを噛ませ給ひければ瓢は枯れたり八かくて日の出時神暑き東風を備へ給ひ又日ヨナの首を照しければ彼よわりて心の中に死ることを願ひて言ふ生るこそよよりも死るかた我に善し九神またヨナに曰ひ給ひけるは瓢の爲に汝のいかる事いかで宜しからんや彼いひけるはわれ怒りて死るこそよろし十エホバ曰たまひけるは汝は勞をくはへず生育さる此の一夜に生じて一夜に亡びし瓢を惜めり十一まして十二萬餘の右左を辨へざる者さ許多の家畜さあるこの大なる府ニネベをわれ惜まざらんや



ヨナ書終... 第一節 第二節 第三節 第四節 第五節 第六節 第七節 第八節 第九節 第十節 第十一節 第十二節 第十三節 第十四節 第十五節 第十六節 第十七節 第十八節 第十九節 第二十節 第二十一節 第二十二節 第二十三節 第二十四節 第二十五節 第二十六節 第二十七節 第二十八節 第二十九節 第三十節 第三十一節 第三十二節

ミカ書

第一章 ユダの王ヨタムアハズあふびヒセキヤの代にモレシテ人ミカに臨めるエホバの言 是すなほち

一 サマリヤをエルサレムの事につきて彼が示されたる者なり二 萬民よ聴け地さその中の者よ耳を傾けよ主エホ  
二 バ 汝らに對ひて證を立て給はん即ち主その 聖殿より之を立たまふべし 三 視よエホバの處より出て  
三 四 地の高處を踏みたまはん 四山は彼の下に融け谷は裂けたり火の前なる巔のごさく坡に流るる水のごさ  
四 五 し五是みなヤコブの怒のゆゑイスラエルの家の罪のゆゑなりヤコブの怒は何か サマリヤにあらずやユダ  
五 六 の崇邱は何か エルサレムにあらずや 六 この故に我サマリヤを野の石堆となし葡萄を植る處を爲し又そ  
六 七 の石を谷に投おこしその基を露さんそその石像はみな砕かれその獲たる價金はみな火にて焚かれん我  
七 八 の偶像をこさくく毀たん彼妓女の價金よりこれを積たれば是はまた歸りて妓女の價金となるべし 八 我  
八 九 これがために哭き咄ばん衣を脱ぎ裸體にて歩行人山犬のごさくくに哭き駝鳥のごさくくに啼ん 九 サマリヤの傷は  
九 十 醫すべからざる者にてすでにユダに至り我民の門エルサレムにまであふべり 十 ガテに傳ふるなれ泣きけぶ  
十 一 勿れベテレアフラにて我座の中に輾びたり 十一 サビルに住める者よ汝ら裸になり辱を蒙りて進みゆけ  
十 二 アナシに住める者は敢て出すべテエセルの哀哭によりて汝らば立處を得ず 十二 マロテに住める者は己の幸  
十 三 福につきて思ひなやむ其は災禍エホバより出てエルサレムの門に臨めばなり 十三 ラキシに住める者よ馬に車  
十 四 をつなげラキシはシオンの女の罪の根本なりイスラエルの怒は汝の中に見ゆ 十四 この故に汝モレセテガテ  
十 五 に離別の饋物を與へよアクシツの家々はイスラエルの王等におけるこゝ人を欺く溪川の如くなるべし  
十 五 十六 マレシヤにすめる者よ我また汝の地を獲べき者を汝に擧へ往べしイスラエルの榮光アドラムは往ん  
十 十六 汝その悦ぶこゝろの子等の故によりて汝の髪を剃るるせ 汝の首の剃し處を大きくして鷺のごさく  
十 十六 せよ其は彼等擧へられて汝を離るればなり  
第二章 その牀にありて不義を圖り惡事を工夫る者等には禍あるべし彼らはその手に力あるが故に天堯



二 におよべばこれを行ふニ彼らは田圃を食りてこれを奪ひ家を食りて是を取りまた人を虐げてその家を掠め人を虐げてその産業をかすむ三この故にエホバは言たまふ視よ我此族にむかひて災禍を降さん謀る汝らはその頸を是より脱するこ能はじまた首をあげて歩くこ能はざるべし其時は災禍の時なればなり四その日には人汝らにつきて詩を作り悲哀の歌をもて悲哀みて言ん事既にいたり我等は盡く滅さる彼わが民の産業を人に與ふ如何なれば我よりこれを離すや我等の田圃を遠逆者に分ち與ふ五然ば汝らエホバの會衆の中には籤によりて繩をうつ者一人も有らじ六預言する勿れ彼らは預言す彼らは是等の者等にむかひて預言せじ恥辱かれらを離れざるべし七汝ヤコブの家を稱へらるる者よエホバの氣短からんやエホバの行爲是のこさくならんや我言は品行正直者の益ならざらんや八然るに我民は近頃起りて敵となれり汝らは夫の戦争を避けて心配なく過るこころの者等に就てその衣服の外衣を奪ひ九我民の婦女をその悦ぶこころの家より逐いだしその子等より我の妝飾を永く奪ふ十起て去れ是は汝らの安息の地にあらす是は已に汚れたれば必ず汝らを滅さん其滅亡は劇しかるべし十一人もし風に歩み謊言を宣へ我葡萄酒と濃酒の事に つきて汝に預言せんと言こあらば其人はここの民の預言者ならん十二ヤコブよ我かならず汝をこさくく集へ必ずイスラエルの遺餘者を聚めん而して我之を同一に置きボツラの羊のこさく成しめん彼らは人敗衆きによりて牧場の中なる群のこさくにその聲をたてん十三打破者かれらに先だちて登り彼ら遂に門を打破り之を通りて出ゆかん彼らの王その前にたちて進みエホバの首に立たまふべし

第三章 一我言ふヤコブの首領よイスラエルの家の侯伯よ汝ら聽け公義は汝らの知べきこさに非ずや二汝らは善を惡み惡を好み民の身より皮を剥ぎ骨より肉を剔り三我民の肉を食ひその皮を剥ぎその骨を碎きこれを切きさみて鍋に入る物のごさくし鼎の中に入れて肉のごさくす四然ば彼時に彼らエホバに呼はるこもエホバかれらに應へたまはじ却てその時には面を彼らに隠したまはん彼らの行惡しければなり五我民を惑はす預言者は齒にて嚙むべき物を受る時は平安あらんと呼はれども何をもその口に與へざる者にむかひては戰鬥の

六 準備をなすエホバ彼らにつきて斯いひ給ふ六然ば汝らは夜に遭へし復異象を得じ黑暗中に遭へし復ト兆を得じ日はその預言者の上をばなれて没りその上は晝も暗かるべし七見者は愧を抱きト者は面を蔽らめ皆共にその唇を掩はん神の垂應あらざればなり八然れども我はエホバの御靈によりて能力身に満ち公義あふび勇氣衷に滿ればヤコブにその愆を示しイスラエルにその罪を示すこを得九ヤコブの家の首領等あふびイスラエルの家の牧伯等公義を惡み一切の正直事を曲る者よ汝ら之を聽け十彼らは血をもてシオンを建て不義をなすエホバを建つ十一その首領等は賄賂をとりて審判をなしその祭司等は値錢を取りて教誨をなす又その預言者等は銀子を取りて占トを爲しエホバに倚頼みて云ふエホバ我らと偕に在すにあらすや然ば災禍はわれらに降りじこ十二是によりてシオンは汝のゆゑに田圃となりて耕されエホバは石堆となり宮の山は樹の生しげる高處ならん

第四章 一末の日にいたりてエホバの家の山 諸の山の巔に立ち諸の嶺にこえて高く聳へ萬民河のこさく之に流れ歸せん二即ち衆多の民來りて言ん去來我等エホバの山に登りヤコブの神の家にゆかんエホバその道を我らに教へて我らにその路を歩ましめたまはん律法はシオンより出でエホバの言はエホバより出べければなり三彼衆多の民の間を鞠き強き國を規戒め遠き處にまでも然し給ふべし彼らはその劍を鋤に打ちかへその鎗を鎌に打ちかへん國を國は劍を擧て相攻めすまた重れて戦争を習はじ四皆その葡萄樹の樹の下に坐しその無花果の樹の下に居らん之を懼れしむる者なるべし萬軍のエホバの口之を言ふ五一切の民はみな各其神の名によりて歩む然れども我らは我らの神エホバの名によりて永遠に歩まん六エホバ言たまふ其日には我の足蹇たる者を集へかの散されし者あふび我が苦しめし者を聚めせその足蹇たる者をもて遺餘民となし遠く逐やられたりし者をも強き民となさん而してエホバシオンの山において今より永遠にこれが王ならん八羊樓シオンの女の山よ最初の權汝に歸らん即ちエホバの女の國祚なんちに歸るべし九汝なにて喚叫ぶや汝の中に王なきや汝の議者絶果てしや汝は産婦の如くに痛苦を懷くなり十シオンの女よ産婦



の如く劬勞みて産め汝は今邑を出て野に宿りバビロンに往ざるを得ず彼處にて汝救はれんエホバ汝を  
 十一 今許多の國民あつまりて汝におしよせて言ふ願くはシオン  
 十二 の汚されんことを我ら目にシオンを觀てなぐさまんよ 十二さりながら彼らはエホバの思念を知らずまたその  
 十三 御謀議を曉らすエホバを打撃にあつむる如くに彼らを聚めたまへり 十三シオンの女よ起てこなせ我なん  
 ちの角を鐵にし汝の蹄を銅にせん 汝許多の國民を打碎くべし汝われらの掠取物をエホバに獻げ彼  
 らの財産を全地の主に奉納べし  
 一 第五章 一軍隊の女よ今なんぢ集りて隊をつくれ敵われらを攻めこみ杖をもてイスラエルの士師の頰を  
 二 撃つ 二ニベテレヘムエブラタ 汝はユダの郡中にて小き者なり然れどもイスラエルの君なる者汝の申  
 三 より我ために出べしその出る事は古昔より永遠の日よりなり 三是故に産婦の産ぶさすまで彼等を付しおきた  
 四 まはん然る後その遺れる兄弟イスラエルの子孫ささにも歸るべし 四彼はエホバの力に由りその神エホバの  
 五 名は威光によりて立てその群を牧ひ之をして安然に居らしめん今彼は大きな者となりて地の極にまで及ばん  
 六 五彼は平和なりアツスリヤ人われらの國に入り我らの宮殿を踏あらさんとする時は我等七人の牧者八人の人  
 七 君を立てて之に當らん 六彼ら劍をもてアツスリヤの地をほろぼしニムロテの地の邑々をほろぼさんアツスリ  
 八 ヤの人我らの地に攻めり我らの境を踏あらす時には彼その手より我らを救はん 七セヤコブの遺餘者は衆多の  
 九 民の中に在ること人に頼らず世の人を俟ずしてエホバより降る露の如く青草の上にふりし雨の如くならん  
 十 ハヤコブの遺餘者の國々に在り衆多の民の中になる様は林の獸の中に獅子の居る如く羊の群の中に猛き  
 十一 獅子の居る如くならんその過るときは踏みかつ裂くことをなす救ふ者なし 九望むらくは汝の手汝が諸の敵の  
 十二 上にあげられ汝ももろくの仇ごとく絶れんことを 十エホバ言たまふ其日には我なんぢの馬を汝の中よ  
 十三 り絶ち汝の車を毀ち 十一汝の國の邑々を絶し汝の一切の城をこさくく圮さん 十二我また汝の手より魔術  
 十四 を絶ん汝の中へ下笠師無きに至るべし 十三我なんぢの影像もよび柱像を汝の中より絶ん汝の手にて作れる

者汝重れて拜むこと無かるべし 十四我また汝のアシラ像を汝の中より拔たふし汝の邑々を滅さん 十五  
 而して我忿怒を憤恨をもてその聽従はざる國民に仇を報いん  
 一 第六章 一請ふ 汝らエホバの宣ふことを聽け 汝起あがりて山の前に辨争へ崗に汝の聲を聽かしめよ 二  
 二 山々よ地の易ることをなき基よ 汝らエホバの辨争を聽け 汝起あがりて山の前に辨争を爲しイスラエルを論せん 三我  
 三 民よ我何を汝になしや何において汝を疲らせたるや我に向ひて證せよ 四我はエジプトの國より汝を導  
 四 きのぼり奴隸の家より汝を贖ひいだしモトセアロンもよびミリアムを遣して汝に先だたしめたり 五我民よ  
 五 請ふモアブの王バラクが謀りし事もよびベオルの子バラムがこれに應へし事を念ひシツテムよりギルガルに  
 六 いたるまでの事等を念へ然らば汝エホバの正義を知らん 六我エホバの前に何をもちゆきて高き神を拜せん  
 七 燔祭の物もよび當歳の積をもてその御前にいたるべきや 七エホバ數千の牡羊萬流の油を悦びたまは  
 八 んか我愆のためにはわが長子を獻げんか 我靈魂の罪のために我身の産を獻げんか 八人よ彼さきに善事の何  
 九 なるを汝に告げたりエホバの汝に要めたまふ事は唯正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神さばに歩む事  
 十 ならずや 九エホバの聲邑にむかひて呼ばる智慧ある者はなんぢの名を仰かん 汝ら管杖もよび之を遣らん 定  
 十一 めし者に聽け 十惡人の家に猶惡財ありや 十一我もし正しからざる權衡を用ひ袋  
 十二 に偽の碼子をいれおかば争で潔からんや 十二その富る人は強暴にて充ち其居民は謙言を言ひその舌は口  
 十三 の中に欺くことを爲す 十三是をもて我も汝を撃ちて重傷を負はせ汝の罪のために汝を滅す 十四汝は食ふこ  
 十四 も飽かず腹はつれに空ならん 汝は移すこともつひに極ふことを得じ汝が拯ひし者は我これを劍に付すべし 十五  
 十五 汝は種播きも刈ることもあらず 橄欖を踐きもその油を身に抹ることあらず 葡萄を踐きもその酒を飲むことあらず  
 十六 汝らにはカマリ法度を守りアハブの家の一切の行爲を行ひて彼等の謀計に違ふ是は我をして汝を  
 荒らしめ且その居民を胡虜さなせしめんが爲なり 汝らはわが民の恥辱を任べし  
 一 第七章 一我は禍なるかな我の景況は夏の果物を採る時のことく遺れる葡萄を飲むる時に似たり食ふべき



二 葡萄あること無く我の心に嗜む初結の無花果あること無し二善人地に絶ゆ人の中に直き者なし皆血を流  
 三 さんさ伏して伺ひ各網をもつてその兄弟を獵る三兩手は悪を善なすに急がし牧伯は要求め裁判人は賄賂を  
 四 取り力ある人はその心の悪しき望を言あらはし斯共にその悪をあざなひ合す四彼らの最も善き者も荆棘の如  
 五 最も直き者も刺ある樹の垣より悪しし汝の觀望人の日すなはち汝の刑罰の日いたる彼らの中に今混亂あ  
 六 らん五汝ら伴侶を信する勿れ朋友を恃むなれ汝の懐に寝ぬる者にむかひても汝の口の戸を守れ六男子は  
 七 父を藐視め女子は母に背き媳は姑に背かん人の敵はその家の者なるべし七我はエホバを仰ぎ望み我を救  
 八 ふ神を望み俟つ我神われに聽たまふべし八わが敵人よ我につきて喜ぶなかれ我介るれば與あがる幽暗  
 九 に居ればエホバ我の光となり給ふ九エホバわが訴訟を理し我ために審判をおこなひたまふまで我は忍びてそ  
 十 の怨怒をかうむらん其は我これに罪を得たればなりエホバつひに我を光明に携へいだしたまはん而して我エ  
 十一 ホバの正義を見ん十わが敵これを見ん汝の神エホバは何處に在るや我に言へる者恥辱をかうむらん我れ  
 十二 を目に見るべし彼は街衢の泥のごとくに踏つけらるべし十一汝の垣を築く日いたらん其日には法度遠く徙る  
 十三 べし十二その日にはアツスリヤよりエジプトの邑々より人々汝に來りエジプトより河まで海より海まで山  
 十四 より山までの人々汝に來り就ん十三その日地はその居民の故によりて荒はつべし是その行爲の果報なり  
 十五 汝の杖をもつて汝の民即ち獨離れてカルメルの中の林に在る汝の産業の羊を牧養ひ之をして古昔の  
 十六 日のごさくバシヤンおよびギレアデにおいて草を食はしめたまへ十五汝がエジプトの國より出來し日のごさ  
 十七 く我ふしぎなる事等を彼にしめさん十六國々の民見てその一切の能力を恥ぢその手を口にあてんその耳は聾  
 十八 さなるべし十七彼らは蛇の如くに塵を餌め地に匍ふ者の如くに其城より振ひて出て戦慄きて我らの神エホバ  
 十九 に詣り汝のために懼れん十八何の神が汝に如かん汝は罪を赦しその産業の遺餘者の愆を見過し給ふなり  
 二十 神は憐憫を悦ぶが故にその震怒を永く保ちたまはず十九ふたたび願みて我らを憐み我らの愆を踏つけ我ら  
 二十の 諸の罪を海の底に投しづめたまはん二十汝古昔の日われらの先祖に誓ひたりしその眞實をヤコブに賜

ひ憐憫をアブラハムに賜はん



ナホム書

第一章 一ニネベに關る重き預言エルコシ人ナホムの異象の書ニエホバは妬みかつ仇を報ゆる神エホバは  
 二 仇を報ゆる者また忿怒の主 エホバは己に逆らふ者に仇を報い己に敵する者にむかひて憤恨を含む者なり  
 三 エホバは怒ることの遅く能力の大なる者また罰すべき者をば必ず救ふことを爲さざる者エホバの道は旋風  
 四 に在り大風に在り雲はその足の塵なり 四 彼海を指斥めて之を乾かし河々をして涸らしむバシヤン  
 五 及びカルメルの艸木は枯れレバノンの花は凋む 五 彼の前には山々ゆるぎ嶺々溶く 彼の前には地墳上り世界  
 六 およびその中に住む者皆ふきあげらる 六 誰かその憤恨に當ることを得ん誰かその燃る忿怒に堪ることを得  
 七 己に倚頼む者善く知り給ふ 八 彼漲る洪水をもてその處を全く滅し己に敵する者を幽暗處に逐やり  
 八 己に倚頼む者善く知り給ふ 八 彼漲る洪水をもてその處を全く滅し己に敵する者を幽暗處に逐やり  
 九 たまはん九汝らエホバに對ひて何を謀るや 彼全く滅したまふべし 患難かされて起らじ 十 彼等むすびから  
 十一 まれる荊棘のごとくなることも酒に浸りたることも乾ける藁のごとくに焚つくさるべし 十一 エホバに對ひて惡事  
 十二 を謀る者一人汝の中より出て邪曲なる事を勤む 十二 エホバは言たまふ彼等全くしてその數夥多し  
 十三 ることも必ず変たふされて皆絶えん 我前には汝を苦しめたれども重ねて汝を苦しめじ 十三 いま我われが汝に負  
 十四 せし軛を碎き汝の縛を切りなすべし 十四 エホバは汝の事につきて命令を下す汝の名を負ふ者再び播る  
 十五 ことあらじ 汝の神々の室より我 雕像および鑄像を除き絶つべし 我汝の墓を備へん 汝輕ければなり  
 十五 嘉き音信を傳ふる者の脚山の上に見ゆ 彼平安を宣ぶ ユダよ 汝の節筵を行ひ 汝の誓願を果せ  
 邪曲なる者重ねて汝の中を通らざるべし 彼は全く絶たる

第二章 一 擊破者 攻のぼりて汝の前に至る 汝城を守り路を窺ひ腰を強くし 汝の力を大に強くせよ  
 二 エホバはヤコブの榮を舊に復してイスラエルの榮のごとくしたまふ 其は掠奪者これを掠めその葡萄蔓  
 三 を壞ひたればなり 三 その勇士は楯を紅にしその軍兵は紅に身を甲ふ 其行伍を立つる時には 戰車の



四 鐵灼爍て火のさし鎗また閃めきふるふ四戰車街衢に狂ひ奔り大路に推あふ其形状火炬のごさく  
 五 其疾く馳するごさ電光の如し五彼の將士を憶ひいたす彼らは其途にて躓き仆れその石垣に奔ゆき大楯  
 七六 備ふ六河々の門啓け宮消うせん七この事定まり彼は裸にせられて携れゆきその宮女胸を打ちて鶴のご  
 八 さくに啼くべし八ニネべはその建し日より以來水の満る池に似たりしがその民今は逃奔る止れ止れご  
 十九 呼ごも後を顧みる者なし九白銀を奪へよ黄金を奪へよその寶物限なく諸の貴さき器用夥多し十滅  
 十一 亡たり空虚なれり荒果たり心は消え膝は慄ひ腰には凡て劇しき痛あり面はみな色を失ふ十一獅子の穴は何處  
 十二 ぞや少き獅子の物を食ふ處は何處ぞや雄獅子雌獅子その小獅子ささもに彼處に歩むに之を懼れしむる者なし  
 十三 雄獅子は小獅子のために物を噛ころし雌獅子の爲に物をくびり殺しその掠獲たる物をもて穴に充しその  
 裂殺しし物をもて住所に満す十三萬軍のエホバ言たまふ視よ我なんぢに臨む我なんぢの戦車を焚きて煙さ  
 十五 ますべし汝の少き獅子はみな劍の殺す所さならん我また汝の獲物を地より絶べし汝の使者の聲がされて聞ゆ  
 るごさ無からん

二 第三章 一 禍なるひな血を流す邑その中には全く詭譎および暴行充ち掠め取るごさ息ます二鞭の音あり輪  
 三 の轟く音あり馬は躍り跳ね車は鞭り行く三騎兵馳のぼり劍きらめき鎗ひらめく殺さるる者夥多しくして  
 四 死屍山を爲し死骸限なし皆死屍に躓きて倒る四是はひの魔術の主なる美しき妓女多く淫行を行ひそ  
 五 の淫行をもて諸國を奪ひその魔術をもて諸族を惑はしたるに因てなり五萬軍のエホバ言たまふ視よ我なんぢ  
 六 に臨む我なんぢの裳裾を掲げて面の上にて及ぼし汝の陰所を諸民に見し汝の羞づる所を諸國に見すべ  
 七六 し六我また穢はしき物を汝の上に投かけて汝を辱しめ汝をして糞物さならしめん七凡て汝を見る者はみな  
 八 汝を避けて奔り去りニネべは亡びたり言ん誰が汝のために哀かんや何處よりして我なんぢを申ふ者を尋  
 九 れ得んや八汝あにノアモンに愈らんやノアモンは河々の間に立ち水をその周圍に環らし海をもて壕さなし海  
 九をもて垣さなせり九かつその勢力たる者はエテオヒア人およびエジプト人などにして限あらずフテ人ルビ

十 人など汝を助けたりき十然るに是も俘囚さなりて携れてゆきその子女は一切の衛の隅々にて投付けられて碎  
 十一 け又その尊貴者は鐵にて分たれ其大なる者はみな鎖に繋がれたり十一汝もまた醉せられて終に隠れん汝  
 十二 もまた敵を避て逃るる處を尋ね求めん 十二汝の城々はみな初に結びし果のなれる無花果樹のごさし之を撼び  
 十三 せばその果落て食はんとする者の口にいる 十三汝の中にある民は婦人のごさし汝の地の門はみな汝の敵の前  
 十四 に廣く開きてあり火なんぢの關を焚ん 十四 汝水を汲て圍まるる時の用に備へ汝の城々を堅くし泥の中に入り  
 十五 て踐て石灰を作りかつ瓦焼窯を修理へよ 十五 其處にて火汝を焼き劍なんぢを斬らん其なんぢを滅すごさ吸  
 十六 蝗のごさくなるべし 汝吸蝗のごさく數多からば多かれ 汝群蝗のごさく數多からば多かれ 十六 汝はお  
 十七 のれの商賈を空の星よりも多しせり吸蝗掠めて飛さる 十七 汝の重臣は群蝗のごさく汝の軍長は蝗の  
 十八 群のごさし寒き日には垣に巢窟を構へ日出きたれば飛び去るその在る處を知る者なし 十八 アツスリヤの王  
 十九 よ汝の牧者は睡り汝の貴族は臥す又なんぢの民は山々に散さる之を聚むる者なし 十九 汝の傷は愈ゆる  
 二十 こと無し汝の創は重し汝の事を聞ふ者ばみな汝の故によりて手を拍たん誰が汝の悪行を恒に身に受け  
 ざる者やある



ナホム書終

ハバクク書

一 第一章 預言者ハバククが示を蒙りし預言の重負ニエホバは我呼はるに汝の我に聽たまはざるこそ何時  
 二 までぞや我なんぢにむかひて強暴を訴たふれども汝は助けたまはざるなり三 汝何ぞて我に害悪を見せた  
 三 まふや何ぞて艱難を瞻望め居たまふや奪掠あふび強暴わが前に行はる且争論あり闘争あるは是に  
 四 りて律法弛み公義正しく行はれず惡しき者義しき者を圍むが故に公義曲りて行はる五 汝ら國々の民の中を  
 五 望み觀駭け駭け汝らの日に我一の事を爲さん之を告ぐる者あるも汝ら信ぜざらん六 視よ我カルテ  
 六 ヤ人を興さんこそ是すなばち猛くまた荒き國人にして地を縦横に行めぐり己の有ならずる住處を奪ふ  
 七 者なり七是は懼るべく又驚くべし其是非威光は己より出づ八 その馬は豹よりも迅く夜求食する豺狼より  
 八 も疾し其騎兵は跑まはる即ちその騎兵は遠き處より來る其飛ぶことは物を食はんと急ぐ驚のごとし九 是は  
 九 全く強暴のために來り其面を前にむけて顔に進むその俘虜を寄集むることば砂のごとし十 是は王等を侮  
 十 り君等を笑ひ諸の城々を笑ひ土を積あげてこれを取ん十一 斯て風のこごくに行めぐり進みわたりて罪を獲  
 十一 ん是は己の力を神さす十二 エホバわが神わが聖者よ汝は永遠より在すに非ずや我らは死なじエホバよ  
 十二 汝は是を審判のために設けたまへり磐石汝は是を懲戒のために立たたまへり十三 汝は目清くして肯て惡を觀  
 十三 給はざる者肯て不義を視たまはざる者なるに何ゆゑ邪曲の者を觀して置きたまふや惡しき者の己にまさり  
 十四 て義しき者を呑噬ふに何ゆゑ汝黙し居たまふや十四 汝は人をして海の魚の如くならしめ君あらぬ昆蟲のご  
 十五 ごとくならしめたまふ十五 彼釣をもて之を盡く釣あげ網をもて之を寄せ集め引網をもて之を捕ふるなり是に  
 十六 因りて彼歡び樂しむ十六 是故に彼その網に犠牲を獻げその引網に香を焚く其は之のためにその分肥まさり  
 十七 その食饒になりたればなり十七 然る彼はその網を傾けつゝなほたえず國々の人を惜みなく殺すことをす  
 するならん

第二章 我わが觀望所に立ち成樓に身を置かん而して我候ひ望みて其われに何ぞ宣ふかを見わが談言

ハバクク書

第一章 第二章

自一至二章一節



二に我みづから何と答ふべきかを見んニエホバわれに答へて言たまはく此黙示を書しるして之を板の上に明白  
 三に鑄つけ奔りながらも之を讀べからしめよ三この黙示はなほ定まれる時を俟てその終を急ぐなり偽ならず  
 四若し遅くあらば待て必ず臨むべし滯滞りはせじ四視よ彼の心は高ぶり其中にありて直からず然と義しき者  
 五はその信仰によりて活べし五かの酒に耽る者は邪曲なる者なり驕傲者にして安んぜず彼はその情慾を陰府  
 六のこころに潤くすまた彼は死のこころ又足こころを知らず萬國を集へて己に歸せしめ萬民を聚めて己に就しむ  
 七其等の民みな諺語をもて彼を評し嘲弄の詩歌をもて彼を調せざらんや即ち言ん己に屬せざる物を積累ぬる者  
 八らんや汝を憐ます者醒出ざらんや汝は之に掠めらるべし八汝衆多の國民を掠めしに因てその諸の民  
 九の遺れる者なんちを掠めん是人の血を流ししに因るまた強暴を地上に行ひて邑その内に住める一切の  
 十者こに及ぼせしに因るなり九災禍の手を免れんが爲に高き處に巢を構へんとして己の家に不義の利を取る者  
 十一は禍なるかな十汝は事を圖りて己の家に恥辱を來らせ衆多の民を滅して自ら罪を取れり十二石垣の石叫び  
 十二建物の梁これに應へん十三血をもて邑を建て惡をもて城を築く者は禍なるかな十三諸の民は火のために  
 十三勞し諸の國人は虚空事のために疲る是は萬軍のエホバより出づる者ならずや十四エホバの榮光を認むる  
 十四の知識地上に充て宛然海を水の掩ふが如くならん十五人に酒を飲せ己の忿怒を酌和へて之を醉せ而して之  
 十五を陰所を見んとする者は禍なるかな十六汝は榮譽に飽かずして羞辱に飽けり汝もまた飲みて汝の不割禮  
 十六を露せエホバの右の手の杯汝に巡り來るべし汝は汚なき物を吐て榮耀を掩はん十七汝がレバノンに爲た  
 十七る強暴と獸を懼れしめしその滅滅は汝の上に報いたるべし是人の血を流ししに因りまた強暴を地  
 十八上に行ひて邑その内に住る一切の者に及ぼししに因るなり十八雕像はその作者これを刻みたりして何  
 十九の益あらんや又鑄像もよび偽師は語はぬ石にむかひて起たまへと言ふ者は禍なるかな是れに教誨を爲さん  
 十九木にむかひて興ませと言ひ語はぬ石にむかひて起たまへと言ふ者は禍なるかな是れに教誨を爲さん

二十や視よ是は金銀を着せたる者にてその中には全く氣息なし二十然りさいへどもエホバはその聖殿に在ます  
 二十一ぞかし全地その御前に黙すべし  
 第二章一シギヨノテに合せて歌へる預言者ハバククの祈禱ニエホバよ我なんちの宣ふ所を聞きて懼るエ  
 二ホバよこの諸の年の中間に汝の運動を活潑せたまへ此諸の年の間に之を顯現したまへ怒るとき  
 三にも憐憫を忘れたまはざれ三神テマンより來り聖者バラン山より臨みたまふセラ其榮光諸天を蔽  
 四ひ其讚美世界に徧し四その朗耀は日のごそく光線その手より出づ彼處はその權能の隠る所なり五疫  
 五病その前に先だち行き熱病その足下より出づ六彼立ちて地を震はせ觀まはして萬國を戰慄かしめ給ふ  
 六永久の山は崩れ常磐の岡は陥る彼の行ひたまふ道は永久なり七我觀るにクシヤンの天幕は艱難に罹り  
 七ミデアンの地の幃幕は震ふ八エホバよ汝は馬を驅り汝の拯救の車に乗りたまふ是河にむかひて怒りたまふ  
 八なる河にむかひて汝の忿怒を發したまふなるか海にむかひて汝の憤恨を洩したまふなるか九汝の  
 九弓は全く囊を出で杖は言をもて言かためらるセラ汝は地を裂て河をなしたまふ十山々汝を見て震ひ  
 十洪水溢れわたり淵聲を出してその手を高く擧ぐ十一汝の奔る矢の光のため汝の鎗の電光のごそき閃爍の  
 十一ために日月その住處に立さざる十二汝は憤ほりて地を行めぐり怒りて國民を踏つけたまふ十三汝は  
 十二汝の民を救はんさて出きたり汝の膏沃ける者を救はんさて臨みたまふ汝は惡しき者の家の頭を碎きその石  
 十三礎を露はして頸に及ぼし給へり十四汝は彼の鎗をもてその將帥の首を刺さほしたまふ彼らは我を散さん  
 十四さて大風の如くに進みきたる彼らは貧しき者を密に吞ほるぼす事をもてその樂さす十五汝は汝の馬を  
 十五もて海を乗さほり大水の逆巻くこころを迷り給ふ十六我聞きて腸を断つ我唇その聲によりて震ふ腐  
 十六朽わが骨に入り我下體わななく其は我患難の日の來るを待てばなり其時には即ち此民に攻寄する者あり  
 十七て之に押逼らん十七その時には無花果の樹は花咲かず葡萄の樹には果ならず橄欖の樹の産は空しくなり  
 十八田圃は食糧を出さず園には羊絶え小屋には牛なかるべし十八然ながら我はエホバによりて樂しみわが拯救の



千九 神によりて喜ばん 十九主エホバは我力にして我足を鹿のごさくならしめ我をしてわが高き處を歩ましめたまふ。○伶長これを我琴にあはすべし

神によりて喜ばん 十九主エホバは我力にして我足を鹿のごさくならしめ我をしてわが高き處を歩ましめたまふ。○伶長これを我琴にあはすべし

ゼパニヤ書

第一章 アモンの子ユダの王ヨシヤの世にゼパニヤに臨めるエホバの言 一 二の子ゲダリヤはアマリヤの子アマリヤはヒセキヤの子なりニエホバ言たまふわれ地の面よりすべての物をはらひのぞかんニわれ人と獸畜をほろぼし空の鳥海の魚もよび蹟跡になる者も悪人をも滅さん我かならず地の面より人をほろぼし絶んエホバこれを言ふ 四 我ユダとエルサレムの一切の居民の上に手を伸べん我此處よりかの漏のこれるパールを絶ちケマリムの名を祭司と與に絶ち 五 また屋上にて天の衆軍を拜む者エホバに誓を立て拜みながら亦そのれの王を指て誓ふことをする者六 エホバに悖り離るる者エホバを求めず尋ねざる者を絶ん七 汝主エホバの前に黙せよそはエホバの日近づきエホバすてに犠牲を備へその招くべき者をさだめたまひたればなり八 エホバの犠牲の日に我もろくの牧伯と王の子等もよび凡て異邦の衣服を着る者を罰すべし九 その日には我また凡て鬪をさびこえ 強暴と詭譎をもて獲たる物をおのが主の家に満す者等を罰せん十 エホバ曰たまはくその日には魚の門より號呼の聲もこり下邑より喚く聲もこり山々より大なる敗壞あらん十一 マクテシの民も汝ら叫べ其は商賈する民 悉くほろび銀を擔ふ者 悉く絶たればなり十二 その時はわれ燈をもちてエルサレムの中を尋ねん而して洋の上に居着て心の中にエホバは福をもなさず災をもなさずさいふものを罰すべし 十三 かれらの財寶は掠められ彼らの家は荒果てん彼ら家を造ることもその中に住ごをせず葡萄を植ることもその葡萄酒を飲ごをせず 十四 エホバの大なる日近づけり近づきて速に來る聽よ是エホバの日なるぞ彼處に勇士のいたく叫ぶあり 十五 その日は忿怒の日患難もよび痛苦の日荒つて亡ぶるの日 黑暗またをぐらき日 濃き雲らよび黒雲の日 十六 彼をふき鯨聲をつくり堅き城を攻め高き櫓を攻むるの日なり 十七 われ人々に患難を蒙らせて盲者の如くに惑ひあるかしめん彼らエホバにむかひて罪を犯したればなり彼らの血は流されて塵のごさくになり彼らの肉は捨てられて糞土の如くになるべし十八 かれらの銀も金もエホバの烈しき怒の日には彼らを救ふことあたはず全地その嫉妬の火に吞るべし即ち



エホバ地の民をこきくぐ滅したまはん其事まことに速なるべし  
 第二章 汝等羞恥を知らぬ民早く自ら内に省みよ二夫日は糞糠の如く過ぎざる然ば詔言のいまだ行はれ  
 ざる先エホバの烈しき怒のいまだ汝等に臨まざる先エホバの忿怒の日のいまだ汝等に來らざるさきに自ら  
 省みるべし三すべてエホバの律法を行ふ斯地の遙るもの汝等エホバを求め公義を求め謙遜を求め然ば  
 れば汝等エホバの忿怒の日に或は匿さるるこあらん四夫がザは棄られアシケロンは荒れてアシドドは白晝  
 に逐はらばれエクロンは拔さらるべし五海濱に住める者およびクレテの國民は禍なるかなベリシテ人の  
 國カナンよエホバの言なんちらを攻む我なんちを滅して住者なきに至らしむべし六海邊は必ず牧場となり牧  
 者の洞あふび羊の牢そこに在ん七此地はユダの家の殘餘れる者に歸せん彼ら其處にて草飼ひ暮に至ればアシ  
 ケロンに家におく人おそは彼らの神エホバかれらを顧みその俘囚を歸し給ふべければなり八我すでにモアブの  
 嘲弄ミアンモンの子孫の罵詈雑言を聞けり彼らわが民を嘲り自ら誇りて之が境界を侵せしなり九是故に萬軍の  
 エホバイスラエルの神言たまふ我は活く必ずモアブはソドムのごごとくになりアンモンの子孫はゴモラのごご  
 くにならん是は共に蕁麻の蔓延る處となり鹽坑の地となりて長久に荒はつべし我民の遺れる者かれらを掠  
 めわが國民の餘されたる者かれらを獲ん十この事の彼らに臨むは其の傲慢による即ち彼ら萬軍のエホバの  
 民を嘲りて自ら誇りたればなり十一エホバは彼等に對ひては畏しきましまし地の諸の神を饑やし滅した  
 十二まふなり諸の國の民おののそ處より出てエホバを拜まん十二エテオピア人よ汝等もまたわが劍にか  
 十三りて殺さる十三エホバ北に手を伸てアツスリヤを滅したまはん亦ニネベを荒して荒野のごごとき旱地となし  
 十四たまはん十四而して畜の群もろくの類の生物その中に伏し鴉鷓あふび刺猯其柱の頂に住み囀る者  
 十五の聲窓の内にきこえ荒落たる物鬮の上に積り香柏の板の細工露顯になるべし十五是邑は驕り傲りて安泰  
 に立ち惟我あり我の外には誰もなしさ心の中に言つありし者なるが斯も荒はてて畜獸の臥す處なる者  
 かな此を過る者はみな嘶きて手をふるはん

第三章 此暴虐を行ふ悖りかつ汚れたる邑は禍なるかな是は聲を聴いれず教誨を承けずエホバに依  
 頼すおのれの神に近よらず三その中になる牧伯等は吼る獅子の如くその審士は明旦までに何を遺さ  
 る夜求食する狼のごとし四その預言者は傲りかつ詐る人なりその祭司は聖物を汚し律法を破ることな  
 五なせり五その中にいますエホバは義しくして不義を行なひたまはず朝な朝な己の公義を顯して缺ることなし  
 然るに不義なる者は恥を知らず六我國々の民を滅したればその櫓は凡て荒たり我これ街を荒涼れしめた  
 れば往來する者なしその邑々は滅びて人なく住む者なきに至れり七われ前に言ひ汝た我を畏れまた警戒を  
 受くべし然らばその住家は我が凡て之につきて定めたる所の如くに滅されざるべし八然るに彼等は風に起て  
 己の一切の行状を覆れり八エホバ曰たまふ是ゆるに汝らわが起て獲物をする日いたるまで我を俟て我も  
 もろの民を集へ諸の國を聚めてわが憤恨さわが烈しき忿怒を盡くその上にそがんと思ひ定む全地は  
 わが嫉妬の火に焼はるべし九その時われ國々の民に清き唇をあたへ彼らをして凡てエホバの名を呼  
 びしめ心をあはせて之に事へしめん十わが散せし者等の女即ち我を拜む者エテオピアの河々の彼旁よりも  
 來りて我に禮物をささぐべし十一その日には汝われに對ひてをかきたりし諸の行爲をもて羞を得るこ  
 さなるべし其時には我なんちの中より高ぶり樂しむ者等を除けば汝かされてわが聖山にて傲り高ぶる  
 ことなればなり十二われ柔和にして貧しき民をなんちの中にのこさん彼らはエホバの名に依頼むべし十三  
 イスラエルの遺れる者は惡を行はず謙をいはずその口の中には詐偽の舌なし彼らは草食ひ臥やすまん之を  
 懼れしむる者なるべし十四シオンの女よ歡喜の聲を擧よイスラエルよ樂しみ呼ばれエルサレムの女よ心  
 のかぎり喜び樂しめ十五エホバすでに汝の鞫を止め汝の敵を逐はらひ給へりイスラエルの王エホバ汝の  
 中にいます汝はかされて災禍にあふこあらじ十六その日にはエルサレムに向ひて言あらん懼るるなわれ  
 シオンよ汝の手をしなえ垂るるなわれ十七なんちの神エホバなんちの中にいます彼は拯救を施す勇士な  
 り彼なんちのために喜び樂しみ愛の餘りに黙し汝のために喜びて呼はりたまふ十八われ節會のこごにつき



十九 憂ふるものを集めん彼等は汝より出し者なり恥辱われらに蒙ること重負のごとし十九視よその時われ汝を  
 虚過ぐる者を盡く處置し足蹇たるものを救ひ逐はなれたる者を集め彼らをして其羞辱を蒙りし一切  
 二十 國にて稱譽を得させ名を得させし二十その時われ汝らを携へその時われ汝らを集むべし我なんぢらの目  
 の前において汝らの俘囚をかへし汝らをして地上の萬國に名を得させ稱譽を得させしエホバこれを言ふ

第一章一ダリヨス王の二年六月其月の一日にエホバの言預言者ハガイによりてシヤルテルの子エダの  
 二 方伯ゼルバベルおよびヨザダクの子祭司の長ヨシユアに臨めり曰く一萬軍のエホバ曰く曰たまふ是民はエホ  
 三 バの殿を建べき時期未だ來らずさいへり三エホバの言また預言者ハガイによりて臨めり曰く四此殿は毀壞  
 四 をれば汝等板をもてはれる家に居るべき時ならんや五されば今萬軍のエホバ曰く曰たまふ汝等おのれの  
 五 行爲を省察べし六汝らは多く播けども收入るるは少く食へども飽くことを得ず飲ども満足くことを得ず  
 六 衣れども暖きことを得ず又工價を得るものは之を破れたる袋に入る七萬軍のエホバ曰く曰たまふ汝等おの  
 七 れの行爲を省察べし八山に上り木を携へ來て殿を建てよ九されば我これを悦び又榮光を受んエホバ之言ふ  
 八 九なんぢら多く得んことを望みたりしに反つて少かりき又汝等これを家に携へ歸りしとき我これを吹ばらへり  
 九 萬軍のエホバいひたまふ是何故ぞや是は我が殿破壊をるに汝等おのの己の室に走り至ればなり十この  
 十 故になんぢらの上の天は雨露を止め地はその産物を止めたり十一且われ地にも山にも穀物にも新酒にも油に  
 十一 も地の生ずる物にも人にも家畜にも手のもろくの工にもすべて毀壞を召きかうむらしめたり十二シヤルテ  
 十二 ルの子ゼルバベルヨザダクの子祭司の長ヨシユアおよびその残れるすべての民も其神エホバの聲を預  
 十三 言者ハガイの言に聽したがへり是は其神エホバの遣したまひしに因る民みなエホバの前に敬畏たり十三  
 十四 時にエホバの使者ハガイエホバの命により民に告て曰けるは我なんぢらと偕に在りエホバ曰たまふさ十四  
 十五 エホバシヤルテルの子エダの方伯ゼルバベルの心ヨザダクの子祭司の長ヨシユアの心およびその残れるす  
 十五 べての民の心をふりおし給ひければ彼等來りて其神萬軍のエホバの殿にて工作を爲せり十五これダリヨ  
 十六 ス王の二年六月二十四日なりき

第二章一七月其月の二十一日エホバの言預言者ハガイによりて臨めり曰くニシヤルテルの子エダの方  
 二 伯ゼルバベルヨザダクの子祭司の長ヨシユアおよびその残れる一切の民に告よ三なんぢら遺れる者の申こ



一 殿の從前の榮光を見しものは誰ぞや 今これを如何に見るや かの殿にくらぶれば是は汝らの目に何もなき  
 二 如く見ゆるにあらすや 四 エホバ曰たまふセルバベルよ自ら強くせよ ヨザダクの子祭司の長ヨシエアよ自  
 三 強くせよ エホバ言たまふこの地の民よ自らつよくしてはたらけ我なんぢらとさもに在り萬軍のエホバこれ  
 四 を言ふ 五 汝らがエツプトよりいでし時わがなんぢらに約せし言ふよびわが靈なほなんぢらの中に留れり懼  
 五 る勿れ 六 萬軍のエホバのいひ給ふいまだ一度しばらくありてわれ天地と海と陸とを震動はん 七 又われ萬  
 六 國を震動はん また萬國の願ふところのもの來らん 又われ榮光をもてこの殿に充滿さん萬軍のエホバこれ  
 七 を言ふ 八 銀も我ものなり金もわが物なり萬軍のエホバいひたまふ九 この殿の後の榮光は從前の榮光より大  
 八 ならん 十 萬軍のエホバいひたまふこの處においてわれ平康をあたへん 十一 萬軍のエホバいひたまふ 〇 十 夕日ヨ  
 九 スの二年九月二十四日エホバのこゝろは預言者ハガイによりて臨めり 曰く 十一 萬軍のエホバ曰く 曰たまふ律  
 十 法につきて祭司に問ふて曰ふべし 十二 人衣の裾にて 聖肉を携へたらんにその裾もしパン 或は羹 あるひ  
 十一 は酒あるひは油あるひは他の食物に捫らば それらは聖き物となるや祭司たち答へて曰けるは然らず 十三  
 十二 ハガイまたいひけるは屍體に捫りて汚れしもの若これらの物にさはらば其ものはけがるべきや祭司等こたへ  
 十三 て曰けるは汚れん 十四 こゝろに於てハガイ答へて曰けるはエホバ曰たまふ 我前此民もかくの如くまた此國も  
 十四 かくの如し又其手の一切のわざもかくのこゝろ 彼等がその處に獻ぐるものもけかれたるものなり 十五 また  
 十五 今われ 汝らに乞ふ此日より以前すなほちエホバの殿にて石の上に石の置れざりし時を憶念べし 十六 かの時  
 十六 には二十坪もあるべき麥束につきて僅かに十をえまた酒樽につきて五十桶汲まんせしにたゞ二十を得  
 十七 たるのみ 十七 なんぢが手をもて爲せる一切の事に於てわれ不實穂と朽腐穂と電を以てなんぢらを撃てりされ  
 十八 汝ら我にへらざりきエホバこれをいふ 十八 なんぢらこの日より以前を憶念みよ 即ち九月二十四日より  
 十九 エホバの殿の基を置よし日までを思ひ見よ 十九 種子なほ倉にあるや 葡萄の樹 無花果の樹 石榴の樹 橄欖  
 二十 の樹もいまだ實を結ばざりき此日よりのちわれ 汝らを恵まん 〇 二十 此月の二十四日にエホバのこゝろは再び

二二 ハガイに臨めり曰く 二一 ユダの方伯セルバベルに告よ われ天地を震動ん 二三 列國の位を倒さん また異邦  
 二三 の諸國の權勢を滅さん 又車 および之に駕る者を倒さん 馬 および之に騎る者もあのかく其伴侶の劍によ  
 二四 りてたふれん 二三 萬軍の エホバ曰たまはくシヤルテルの子わが僕セルバベルよエホバいふその日に我なん  
 二五 ぢを取りなんちを印の如くにせん そはわれ汝をえらびたればなり 萬軍のエホバこれを言ふ



ハガイ書終

ゼカリヤ書

第一章 ヌダリヨスの二年八月エホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く二エホバに歸れ萬軍のエホバは我も汝らに歸らん四汝らの父等のごさくならざれば前の預言者等おれらに向ひて呼はりて言り萬軍のエホバは言たまふ請ふ汝ら其惡しき道を離れ其惡しき行を棄てて歸れ然るに彼等はは聽かず耳を我に傾けざりきエホバ之を言ふ五汝らの父等は何處にありや預言者等永遠に生きんや六然るに我僕なる預言者等に我が命じたる吾言さわが法度さば汝らの父等に追及たるに非ずや然ゆゑに彼らへりて言り萬軍のエホバ我らの道に循ひ我らの行に循ひて我らに爲さんと思ひたまひし事を我らに爲した

七まへりき〇七ダリヨスの二年十一月すなはちセバテさいふ月の二十四日にエホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く八我夜觀しに一箇の人赤馬に乗て谷の裏なる烏拈樹の中に立ちその後九に赤馬駁馬白馬なる九我我主よ是等は何ぞやと問ひけるに我語ふ天の使われにむかひて是等の何なる十をわれ汝に示さんと言ひ十鳥拈樹の中に立てる人答へて言けるは是等は地上を遍く歩かしめんとてエホバの遣したまひし者なりき十一彼ら答へて鳥拈樹の中に立つエホバの使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全十二地は穢にして安し十二エホバの使言たまへて言ふ萬軍のエホバは汝いつまでエルサレムとユダの邑々を恤み十三たまはざるか汝はこれを怒りたまひてすでに七十年になりぬと十三エホバ我語ふ天の使に嘉言慰言十四をもて答へたまへり十四かくて我語ふ天の使我に言けるは汝呼はりて言へ萬軍のエホバは言たま

十五ふ我エルサレムのためシオンのために甚だしく心を熱して嫉妬おもひ十五安居せる國々の民を太く怒る其は十六我すこしく怒りしに彼ら力を出して之に害を加へたればなり十六エホバは言ふ是故に我憐憫をもてエル

十七サレムに歸る萬軍のエホバは言たまふ我室その中に建てられ量繩エルサレムに張られん十七汝また呼はりて言へ萬軍のエホバは言たまふ我邑々には再び嘉物あふれんエホバは言たまふ再びシオンを慰め再びエルサレム



十八 我に語ふ天の使に是等は何なる  
 十九 我に語ふ天の使に是等は何なる  
 二十 時にエホバ  
 二十一 四箇の鍛冶を我に見したまへり  
 二十二 我は是等は何を爲んきて來れるや  
 二十三 問しに斯きたたまへり  
 二十四 是等の角はエ  
 二十五 散して人にその頭を擧しめざりし者なるが  
 二十六 今この四箇の者來りて之を威士のユダの地にむかひて角を  
 二十七 擧て之を散せし諸國の角を擧たんとす

第二章 茲に我目を擧て觀しに一箇の人量繩を手に執居ければ  
 二 汝は何處へ往くや  
 三 問しにエルサレム  
 四 量りてその廣さ長の幾何なるを觀んぞ  
 五 我に答ふ三時に我に語ふ天の使 出行きたりしが又一箇の天  
 六 使 出行きたりて之に會ひ 四之に言けるは 走ゆきてこの少き人に告て言へ  
 七 エルサレムはその中に人さ蓄さ饑  
 八 なるによりて野原の如くに廣く亘るべし  
 九 エホバ言たまふ我その四周にて火の垣となりその中にて榮光さな  
 十 らん  
 十一 エホバいひ給ふ 來れ來れ北の地より逃げきたれ  
 十二 我なんぢらを四方の天風のごとくに引きわたらし  
 十三 むればなり  
 十四 エホバこれを言ふ 七來れ  
 十五 バビロンの女子とこもに居るシオンよ 遁れ來れ  
 十六 萬軍のエホバの言  
 十七 たまふ  
 十八 エホバ汝等を擡へゆきし國々へ榮光のため我等を遣したまふ  
 十九 汝らを打つ者は彼の目の珠を打つ  
 二十 なければなり  
 二十一 九即ち我手なわれらの上に搥ん彼らは己に事へし者の俘虜さなるべし  
 二十二 汝らは萬軍のエホバの我  
 二十三 を遣したまへるなるを知ん  
 二十四 エホバ言たまふシオンの女子よ 喜び樂しめ  
 二十五 我きたりて 汝の中に住めばな  
 二十六 り  
 二十七 十一その日には許多の民エホバに附きて我民さならん  
 二十八 我なんぢの中に住べし  
 二十九 汝は萬軍のエホバの我を遣し  
 三十 たまへるなるを知ん  
 三十一 エホバ聖地の中にてユダを取りて己の分さなし再びエルサレムを簡びたまふべし  
 三十二 十三 エホバ興てその 聖住所よりいでたまへば凡そ血肉ある者エホバの前に 肅然たれ  
 三十三 第三章 彼祭司の長ヨシユアがエホバの使の前に立ちサタンのその右に立ちて之に敵しなるを我に見す  
 三十四 エホバサタンに言たまひけるは 汝サタンよ エホバ 汝をせむべし  
 三十五 即ちエルサレムを簡びしエホバ 汝をいま  
 三十六 しむ是は火の中より取出したる燐柴ならずや  
 三十七 三ヨシユア汚なき衣服を衣て使の前に立ちをりしが  
 三十八 エホバ

己の前に立る者等に告て汚なき衣服を之に脱せよ  
 二 宣ひまたヨシユアに向ひて觀よ  
 三 我なんぢの罪を汝の身よ  
 四 り取りのぞけり  
 五 汝に美服を衣すべし  
 六 宣へり  
 七 五我また潔き冠冕をその首に冠らせよ  
 八 言り是に於いて潔き冠冕  
 九 をその首に冠らせ衣服をこれに衣す  
 十 エホバの使は立るる  
 十一 エホバの使 證してヨシユアに言ふ  
 十二 七萬軍のエ  
 十三 ホバつく言たまふ  
 十四 汝もし我道を歩みわが職守を守らば我家を司り  
 十五 我庭を守ることを得ん  
 十六 我また此に立る者  
 十七 等の中に往來する路を汝に與ふべし  
 十八 八祭司の長ヨシユアよ 請ふ  
 十九 汝の前に坐する汝の同僚さこもに聽べ  
 二十 し彼らは即ち前表さなるべき人なり  
 二十一 我ならず我 僕たる枝を來らすべし  
 二十二 九ヨシユアの前に我が立つる  
 二十三 の石を視よ  
 二十四 此一箇の石の上に七箇の目あり  
 二十五 我自らその彫刻をなす  
 二十六 萬軍のエホバこれを言ふ  
 二十七 なり  
 二十八 我この地の  
 二十九 罪を一日の内に除くべし  
 三十 十萬軍のエホバ言たまふ  
 三十一 其日には汝等あのみ  
 三十二 互に相招きて葡萄の樹の下無花果の  
 三十三 樹の下にあらん

第四章 我一に語 へる天の使また來りて我を呼醒せり  
 二 我は睡れる人の呼醒されしごとくなり  
 三 二彼我にむひ  
 四 ひて 汝何を見るや  
 五 言ければ我いへり  
 六 我觀に惣金の燈臺一箇ありてその 頂に油を容る器あり  
 七 又燈臺の  
 八 上に七箇の燈 蓋ありその 燈 蓋は燈臺の頂にありて之に 各七本づつの管あり  
 九 三また燈臺の側に橄  
 十 欖の樹二本ありて一は油を容る器の右にあり一はその左にあり  
 十一 四我答へて我に語ふ天の使に問ひ言けるは  
 十二 我主よ 是等は何ぞや  
 十三 五我に語ふ天の 使に答へて 汝是等の何なるを知ざるか  
 十四 言しにより我主よ 知す  
 十五 さわれ言り  
 十六 六彼また答へて我に言けるは  
 十七 セルバベルにエホバの告たまふ言は是の  
 十八 こと  
 十九 萬軍のエホバのたま  
 二十 ふ是は權勢に由ず能力に由ず我靈に由なり  
 二十一 セルバベルの前にあたれる大山よ  
 二十二 汝は何者ぞ  
 二十三 汝は平地さなら  
 二十四 ん  
 二十五 彼は恩恵あれ之に恩恵あれ  
 二十六 汝は聲をたてて頭石を曳いださん  
 二十七 八エホバの言われに臨めり云く  
 二十八 九セルバ  
 二十九 ベルの手この室の石礎を置たり  
 三十 彼の手にこれを成終ん  
 三十一 汝しらん  
 三十二 萬軍のエホバ我を汝等に遣したまひし  
 三十三 十誰  
 三十四 小き事の日を藐視むる者ぞ  
 三十五 夫の七の者は遍く全地に往來する  
 三十六 エホバの目なり  
 三十七 準繩のセルバベルの手にあ  
 三十八 るを見て喜ばん  
 三十九 十一我また彼に問ふて燈臺の右左にある此  
 四十 二本の橄欖の樹は何なるや  
 四十一 言ひ  
 四十二 重ねて



十三 また彼に問て此一本の金の管によりて金の油をその中より斟き出す二枝の橄欖は何ぞやと言しに 十三彼われに答へて汝是等の何なるを知るかと言ければ我主よ知すと言けるに 十四彼言らく是等は油の二箇の子にして全地の主の前に立つ者なり

二一 第五章 一我また目を擧げて觀しに卷物の飛ぶあり 二彼われに汝何を見るやと言ければ我言ふ我卷物の飛ぶを見る 其長は二十キエビト その寬は十キエビト 三彼またわれに言けるは是は全地の表面を往めぐる呪詛の言なり凡て竊む者は卷物のこの面に照して除かれ凡て誓ふ者は卷物の彼の面に照して除かるべし 四萬軍のエホバのたまふ我これを出世せり是は竊盜者の家に入りまた我名を指て偽り誓ふ者の家に入りてその家の中に宿りその木と石とを並せて盡く之を焼べし 五我に語へる天の使進み來りて我に言けるは請ふ目を擧てこの出きたれる物の何なるを見よ 六これは何なるや 我言ければ彼言ふ此出來れる者はエバ舛なり又言ふ全地において彼等の形狀は是のごとし 七かくて鉛の圓蓋を取あぐれば一人の婦人エバ舛の中に坐し居る 八彼は罪惡なりと言てその婦人をエバ舛の中に投げし 九我また目を擧て觀しに婦人二人 出きたれり之に鶴の翼のこき翼ありてその翼風を含む彼等そのエバ舛を天地の間に持擧ぐ 十我すなはち我に語ふ天の使にむかひて彼等エバ舛を何處へ携へゆくなるやと言けるに 十一彼我に言ふシナルの地にて之がために家を建てたり是は彼處に置らるれてその臺の上に立たん

二一 第六章 一我また目を擧て觀しに四輛の車 二一の山の間により出きたれりその山は銅の山なり 三一の車には赤馬を着け第二の車には黒馬を着け 三第三の車には白馬を着け 四第四の車には白點なる強馬を着け 四我すなはち我に語ふ天の使に問て我主よ是等は何なるやと言けるに 五天の使こたへて我に言ふ是は四の天風にして全地の主の前より罷り出たる者なり 六黒馬は北の地をさして進み行き白馬その後に従ふ 七又白點馬は南の地をさして進みゆき 七強馬は進み出て地を徧く行めぐらん 八汝ら往き地を徧くめぐれと言たまひければ則ち地を行きめぐれり 八彼われを呼びて我に告て言ふ此北の地に往る者等は北の地にて我靈を安ん

十九 す 〇九エホバの言われに臨めり曰く 十汝の四隣人の中の者ヘルダイトビヤおよびエダヤより取ることなせよ 十一汝彼らガバビロンより歸りて宿りたるセパニヤの子ヨシヤの家に入り 十二金銀を取て冠冕を造りヨザダクの子なる祭司の長ヨシエアの首にこれを冠らせ 十三彼に語りて言へし萬軍のエホバ斯言たまふ 視よ人ありその名を杖といふ 彼おのれの處よりいでてエホバの宮を建ん 十三即ち彼者エホバの宮を建て尊榮を帯びその位に坐して 政事を施しその位にありて祭司となりん 此二の者の間に平和の計議あるべし 十四倍またその冠冕はヘレムトビヤエダヤおよびセパニヤの子ヘンの記念のために之をエホバの殿に納むべし 十五遠き處の者等來りてエホバの殿を建てん 而して汝らは萬軍のエホバの我を遣したまひしなるを知にいたらん 汝らもし汝らの神エホバの聲に聽したがばは是のごとくなるべし

二一 第七章 一ダリヨス王の四年の九月すなはちキスリウといふ月の四日にエホバの言ゼカリヤに臨めり 二ベテルかの時シヤレセルレゲンメルクおよびその從者を遣してエホバを和めさせ 三かつ萬軍のエホバの室に在る祭司に問しめ且預言者に問しめて言けらく我今まで年久しく爲し來りしごとく尙五月をもて哭きかつ齋戒すべきや 四こゝにおいて萬軍のエホバの言 我に臨めり云く 五國の諸民および祭司に告て言へ汝らは七十年のあひだ五月と七月とに斷食しかつ哀哭せしがその斷食せし時果して我にむかひて斷食せしや 六汝ら食ひ且飲むは全く己のために食ひ己のために飲んらすや 七在昔エルサレムおよび周圍の邑々人の住ふありて平安なりし時 南の地および平野にも人の住ひをりし時に已往の預言者によりてエホバの宣ひたりし言を汝ら知らざるや 〇八エホバの言ゼカリヤに臨めり云く 九萬軍のエホバかく宣へり云く 正しき審判を行ひ互に相愛しみ相憐れめ 十寡婦孤兒旅客および貧者を虐ぐる勿れ人を害せん 心に圖る勿れ 十一然るに彼等は肯て耳を傾けず背を向け耳を鈍くして聽す 十二且その心を金剛石のごとくし 萬軍のエホバの御靈をもて已往の預言者に由て傳へたまひし律法と言詞に聽したがばはさりき是をもて大なる怒萬軍のエホバより出て臨めり 十三彼かく呼ばりたれども彼等聽ざりき 其ごとく彼ら呼ばるるも我聽じ 萬軍のエホバ



十四 これを言ふ 十四我われらにその識ざる 諸の國に吹散すべし其後にてこの地は荒て往來する者なきに至らん

第二章 一 萬軍のエホバの言われに臨めり曰く二 萬軍のエホバかく言たまふ我シオンのために甚だしく心を熱して妬く思ひ大なる忿怒を起して之がために妬く思ふ三 エホバかく言たまふ今我シオンに歸れり我エル

四 サレムの中に住んエルサレムは誠實ある邑と稱へられ萬軍のエホバの山は聖山と稱へらるべし四 萬軍のエホバかく言たまふエルサレムの街衢には再び老たる男老たる女坐せん皆年高くして各杖を手に持

つべし五 またその邑の街衢には男の兒女の兒滿て街衢に遊び戯れん六 萬軍のエホバかく言たまふこの事其日には此民の遺餘者の目に奇しきいふさも我目に何の奇しきこと有んや萬軍のエホバ之を言ふ七 萬軍の

八 エホバかく言たまふ視よ我わが民を日の出る國より日の入る國より救ひ出し八 我われらに携へ來りてエルサレムの中に住しめん彼らば我民となり我は彼らの神となりて共に誠實と正義に居ん九 萬軍のエホバかく言たま

ふ汝ら萬軍のエホバの室なる殿を建んきて其基礎を置たる日に起りし預言者等の口の言詞を今日聞く者よ汝らの腕を強くせよ十 此日の先には人も工の價を得ず獸畜も工の價を得ず出者も入者も仇の故をもて安然

ならざりき 即ち我人々をして互に相攻めたり 十一 然れども今は我此民の遺餘者に對するこそ豈の日のこそくならずと萬軍のエホバ言たまふ 十二 即ち平安の種子あるべし葡萄の樹は果を結び地は産物を出し

天は露を與へん我この民の遺餘者にこれを盡く獲さすべし 十三 ユダの家およびイスラエルの家よ汝らが國々の中に呪詛となりしこそく此度は我なんぢらを救ふて祝言ならしめん懼るる勿れ汝らの腕を強くせよ

十四 萬軍のエホバかく言たまふ在昔汝らの先祖我を怒らせし時に我これに災禍を降さんと思ひて之を悔ざりき萬軍のエホバかく言たまふ 十五 是のこそく我また今日エルサレムとユダの家に福祉を降さんと思ふ汝ら懼

る勿れ 十六 汝らの爲へき事は是なり汝ら各たがひに眞實を言べし又汝等の門にて審判する時は眞實を執て平和の審判を爲べし 十七 汝等すべて人の災害を心に圖る勿れ 偽の誓を好む勿れ是等はみな我が惡む者な

十九 りとエホバ言たまふ ○ 十八 萬軍のエホバの言われに臨めり云く 十九 萬軍のエホバかく言たまふ 四月の斷食 五月の斷食 七月の斷食 十月の斷食 一へつてユダの家の宴樂となり欣喜となり佳節となるべし惟なんぢ

二 眞實と平安を愛すべし 二十 萬軍のエホバかく言たまふ 國々の民および衆多の邑の居民來り就ん 二一 即ちこの邑の居民往てこの邑の者に向ひ我等すみやかに往てエホバを和め萬軍のエホバを求めんと言んに我

も往べしと答へん 二二 衆多の民強き國民エルサレムに來りて萬軍のエホバを求めエホバを和めん 二三 萬軍のエホバかく言たまふ其日には 諸の國語の民十人にてユダヤ人一箇の裾を拉へん即ち之を拉へて言ん我

ら汝らと與に往べし其は我ら神の汝らと偕にいますを聞たればなり 第九章 一 エホバの言詞の重寶ハテラクの地に臨む ダマスコはその止まる所なりエホバ世の人を眷みイス

ラエルの一切の支派を眷みたまへばなり 二之に界するハマテも然りツロ シドンも亦甚だ伶俐ければ同

じく然るべし 三ツロは自己のために城廓を構へ銀を塵のこそく積み 金を街衢の土のこそくに積めり

四 視よ主これを攻取り海にて之が力を打ほろぼし給ふべし是は火にて焚うせん 五 アシタロンこれを見て懼

れかザもこれを見て大く慄ふ エグロンもその望む所の者辱しめらるるに因て亦然りかザには王絶えアシ

タロンには住者なきに至らん 六 アシドドにはまた雜種の民すまん我ハリシテ人が誇る所の者を絶べし 七 我こ

れが口より血を取除き之が齒の間より憎むべき物を取除かん是も遺りて我等の神に歸しユダの牧伯のこそく

に成べし またエグロンはエブス人のこそくになるべし 八 我わが家のために陣を張て敵軍に當り之をして往來

するこそ無らしめん 九 過者かされて逼るこそ無るべし 我わが家をもて親ら見ればなり ○ 九シオンの女よ

大に喜べ エルサレムの女よ呼ばれ 視よ汝の王汝に來る 彼は正義して拯救を賜はり柔和にして驢馬

に乗る即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり 十 我エフラタイムより車を絶ちエルサレムより馬を絶ん 戰爭弓も絶

るべし 彼國々の民に平和を諭さん 其政治は海より海に及び河より地の極におよぶべし 十一 汝について

はまた汝の契約の血のために我がの水なき坑より汝の被俘人を放ち出さん 十二 望み懷く被俘人は汝等城



十三 我今日もなほ告て言ふ我ならず倍して汝等に資ふべし 十三我エダを張て弓さなしエフライムを  
 矢さなして之につがへん シオンよ我汝の人々を振り起してギリシヤの人々を攻しめ汝をして大丈夫の劍の  
 十三 我今日もなほ告て言ふ我ならず倍して汝等に資ふべし 十三我エダを張て弓さなしエフライムを  
 矢さなして之につがへん シオンよ我汝の人々を振り起してギリシヤの人々を攻しめ汝をして大丈夫の劍の  
 十四 ごさくならしむべし 十四 エホバこれの上に顯れてその箭を電光のごさくに射いたしたまはん 主エホバ喇叭を  
 吹ならし南の暴風に乗りて出来まさん 十五 萬軍のエホバ彼らを護りたまはん 彼等は食ふごさを爲し投石器の  
 十五 石を踏つけん 彼等は飲ごさを爲し酒に酔るごさくに聲を擧ん其これに盈さるごさは血を盛る鉢のごさく祭  
 壇の隅のごさくなるべし 十六 彼らの神エホバ當日に彼らを救ひその民を羊のごさくに救ひたまはん 彼等は  
 冠冕の玉のごさくになりて其地に輝くべし 十七 其の福祉は如何計ぞや其美麗は如何計ぞや穀物は童男  
 を長ぜしめ新酒は童女を長ぜしむ

一 第十章 一 汝ら春の雨の時に雨をエホバに乞へエホバ電光を造り大雨を人々に賜ひ田野において草蔬を各  
 二 賜ふべし 二 夫テラビムは空しき事を言ひト筮師はその見る所眞實ならずして虚偽の夢を語る其怒むる  
 三 所は徒然なり是をもて民は羊の如くに迷ひ牧者なきに因りて惱む 三 我牧者にむひて怒を發す我牡山羊を  
 四 罰せん 萬軍のエホバその群なるエダの家を顧み之をしてその美しき軍馬のごさくならしめたまふ 四 隅石  
 五 彼より出で釘われより出で軍弓われより出で宰たる者みな齊しく彼より出でん 五 彼等戰ふ時は勇士の如く  
 六 にして街衢の泥の中に敵を蹂躙らん エホバ彼等ごさくに在せば彼ら戦はん 馬に騎れる者等すなはち婢を  
 六 抱くべし 六 我エダの家を強くしヨセフの家を救はん 我われらに恤むが故に彼らをして歸り住しめん 彼らは我  
 七 に棄られし事なきが如くなるべし 我は彼らの神エホバなり 我われらに聽べし 七 我フライム人は勇士に等しく  
 七 して酒を飲たるごさく心に 歡ばん 其子等は見て喜びエホバに因りて心に樂しまん 八 我われらに向ひて嘯きて  
 八 之を集めん 其は我これを贖ひたればなり 彼等は昔殖増したる如くに殖増さん 九 我われらを國々の民の中に  
 九 播かん 彼等は遠き國において我をおぼへん 彼らは其子等ご共に生存へて歸り來るべし 十 我われらをエジプ  
 十 トの國より携へてヘリアススリヤより彼等を集めギレアデの地もよびレバノンに彼らを携へていん 其の居處

十一 も無きほどなるべし 十一 彼艱難の海を通り海の浪を撃破りたまふ ナイルの淵は盡く涸る アツスリヤの  
 十二 傲慢は卑くせられエジプトの杖は移り去らん 十二 我彼らをしてエホバに由りて強くならしめん 彼等はエホ  
 十二 巴の名をもて歩まん エホバこれを言たまふ  
 一 第十一章 一 レバノンよ 汝の門を啓き火をして汝の香柏を焚かしめよ 二 松よ 叫け 香柏は倒れ 威嚴き樹は  
 三 三 そこなはれたりバシヤンの椽よ 叫べ 高らなる 林は倒れたり 三 牧者の叫ぶ聲あり 其榮そこなはれたり ば  
 四 なり 猛き獅子の吼る聲あり ヨルダンの叢そこなはれたり ばなり 四 我神エホバかく言たまふ 宰らるべき羔を  
 五 牧へ 五 之を買ふ者は之を宰るごも罪なし之を賣る者は言ふ我富を得ればエホバを視すべし 其牧者もこれ  
 六 を惜まざるなり 六 エホバ言たまふ 我かされて地の居民を惜まじ 視よ 我人各その 鄰人の手に付しその王  
 七 の手に付さん 彼ら地を荒すべし 我これを彼らの手より救ひ出さじ 七 我すなはち 其宰らるべき羊を牧り 是は最  
 八 も 憫然なる羊なり 我みづから二本の杖を取り一を 恩ご名けてその羊を牧り 八 我一月に牧  
 九 者三人を絶てり 我心に彼らを厭ひしが 彼等も心に我を惡めり 九 我言り我は汝らを飼はし 死者は死に 絶  
 十 る者絶れ 遺る者は互にその肉を食ひあふべし 十 我恩さいふ杖を取て之を折れり 是 諸の民に立し 我  
 十一 契約を廢せん してなりき 十一 是は其目に廢せられたり 是に於てかの 我に聽したかひし 憫然なる羊は之をエホ  
 十二 巴の言なりしと知れり 十二 我彼らに向ひて汝等もし善しと視なば 我價を我に授けよ 若しからずば 止めよ  
 十三 言ければ 彼等すなはち 銀三十を擲りて 我價ごせり 十三 エホバ 我に言たまひけるは 彼等に 我が估價せられし  
 十四 その善價を 陶人に投あたへよ 我すなはち 銀三十を取て エホバの室に投いれて 陶人に歸せしむ 十四 我  
 十五 また 結さいふ杖を折れり 是エダとイスラエルの間の和好を絶たん してなりき 十五 エホバ 我に言たまはく 汝  
 十六 また 愚なる牧者の 器を取れ 十六 視よ 我地に 一人の牧者を 興さん 彼は 亡る者を 顧みず 迷へる者を 尋れず 傷け  
 十七 る者を 醫さず 健剛なる者を 飼はす 肥たる者の肉を食ひ 且その蹄を裂ん 十七 其羊の群を棄つる 惡しき牧者は  
 禍なるかな 劍その腕に 臨みその右の目に 臨まん 其腕は 全く枯えその右の目は 全く盲れん



一 第十二章 イスラエルに於けるエホバの言詞の重負 エホバ 即ち天を俯べ地の基を置よ 人の内の靈魂  
 を造る者言ひたまふ 二 視よ我エルサレムをしてその周圍の國民を跟隨はする 杯をならしむべし エルサレム  
 の攻圍まるる時は エダにも及ばん 三 其日には我エルサレムをして 諸の國民に對ひて重石をならしむべし  
 之を持擧ぐる者は大傷を受ん 地土の諸國みな集まりて之に攻寄べし 四 エホバ言たまふ 當日には我一切の馬を  
 撃て駭かせその騎手を撃て狂はせん 而して我エダの家の上に我目を開き 諸の國民の馬を撃て盲になすべし  
 五 エダの牧伯等その心の中に謂ん エルサレムの居民はその神 萬軍のエホバに由り我力さなるべし 六 當  
 日には我エダの牧伯等をして薪の下にある火盤のごとく 麥束の下にある炬火のごとくならしむべし 彼等は右  
 左にむかひその周圍の國民を盡く 焚く 七 エホバ言たまふ 是エダの家を榮ぶよ びエルサレムの居民の榮のユダに勝ること  
 無らん 八 エホバ言たまふ 當日エホバエルサレムの居民を護りたまはん 彼らの中の弱者もその日にはエダのごと  
 九 くなるべし 九 その日はエダの家を榮ぶよ びエルサレムの居民に恩恵を祈禱の  
 十 靈をそよばん 彼等は其の刺したりし我を仰ぎ 觀獨子のために哭く 十一 其日にはエダの家の榮ぶよ びエルサレ  
 十二 悲しむがごとく之がために痛く悲しまん 十二 その日にはエダの家の榮ぶよ びエルサレムの居民に恩恵を祈禱の  
 十三 族 別れ居て哀哭す 其の妻等別れ居て哀哭す 十三 國中の族 別れ居て哀哭す 其の妻等別れ居て哀哭す  
 十四 哀哭す 十四 その他の族も凡て然りす 凡て族の別れ居て哀哭す 其の妻等別れ居て哀哭す  
 第十五 第十三章 一 その日 罪を清むる泉 一 泉 二 エホバ言たまふ 我エルサレムの居民のために開くべし 萬軍のエ  
 ホバ言たまふ 其日には我地より偶像の名を絶つ 泉 二 エホバ言たまふ 我エルサレムの居民のために開くべし 萬軍のエ

および汚穢の靈を地より去しむべし 三人もしなほ預言することあらば 其生の父母これに言ん 汝は生べからず  
 汝はエホバの名をもて虚偽を語るなりと 而してその生の父母これに預言しをるを刺ん 四 その日には預言者等  
 預言するに方りてその異象を羞ん 重んじて人を欺かん ために毛衣を纏はし 五 彼言ん 我は預言者にあらず 地を耕  
 へず者なり 即ち我は若き時より人に買れたり 六 若しこれに向ひて 然らば 汝の兩手の間の傷は何ぞや 言あら  
 ば 是は我が愛する者の家にて受たる傷なりと 答へん 〇 萬軍のエホバ言たまふ 劍よ 起て我 牧者 我伴侶なる  
 人を攻め 牧者を撃て 然らばその羊散ん 我また我手を小き者等の上に伸べし 八 エホバ言たまふ 全地の人二  
 分は絶れて死に 三分の一はその中に遺らん 九 我その三分の一を携へて 火にいれ 銀を焚分くる 一 〇 之を  
 焚分け金を試むる 一 〇 之を試むべし 彼らわが名を呼ん 我これにこたへん 我これは我民なり 言ん 彼  
 等またエホバは我神なり と言ん  
 第十四章 一 視よ エホバの日來る 汝の貨財奪はれて 汝の中に分たるべし 二 我 萬國の民を集めて エル  
 サレムを攻撃しめん 邑は取られ 家は掠められ 婦女は犯され 邑の人の半は擄へられて ゆかん 然らば其餘  
 の民は邑より絶れ 三 その時エホバ出きたりて 其等の國人を攻撃したまはん 在昔その軍陣の日に戦ひたまひ  
 し 一 〇 なるべし 四 其日にはエルサレムの前に當りて 東にあるところの橄欖山の上に 彼の足立ん 而して橄  
 欖山その真中より 西東に裂て 甚だ大なる谷を成し 山の半は北に 半は南に移るべし 五 汝らは我山の  
 谷に逃いらん 其山の谷はアザルにまで 及ぶべし 汝らはエダの王 ヲツヤの世に地震を避て 逃し如くに 逃ん  
 我神 エホバ 來りたまはん 諸の聖者なんぢを偕なるべし 六 その日には光明なるべく 輝く者消すべし  
 七 茲に只一日の日あるべし 八 エホバこれを知らたまふ 是は晝にもあらず 夜にもあらず 夕暮の頃に明くなるべし 八  
 九 その日に 活る水 エルサレムより 出で 其の半は東の海に 其の半は西の海に 流れん 夏も冬も 然あるべし 九 エホ  
 十 全地の王となりたまはん 其日には 只エホバのみ 只その御名のみ ならん 十 全地は アラバのごとく なりて  
 十一 谷より エルサレムの南の リンモンまでの間のごとく なるべし 而して エルサレムは 高くなりて 其の故の處に



立ちてニヤミンの門より第一の門の處に及び隅の門にいたりハナニエルの成樓より王の酒樽倉までに渉るべし 十二その中には人住ん重れて呪詛あらじエルサレムは安然に立べし 十二エルサレムを攻撃し 諸の民にエホバ災禍を降してこれを撃なやましたまふこと是のごとくなるべし 即ち彼らその足にて立なる中に肉腐れ目その孔の中にて腐れ舌その口の中にて腐れん 十三その日にはエホバかれらをして大に狼狽しめたまはん彼らには 各人の手を執へん此手は彼手撃あふべし 十四エダもまたエルサレムに於て戦ふべしその四周の一切の國人の財寶金銀衣服など甚だ多く聚められん 十五また馬騾駱駝馬あふびその諸營の一切の家畜の蒙る災禍もこの災禍のごとくなるべし 十六エルサレムに攻きたりし 諸の國人の遺れる者はみな歳に上りきてその王なる萬軍のエホバを拜み 結茅の節を守るにいたるべし 十七地上の諸族の中その王なる萬軍のエホバを拜みにエルサレムに上らざる者の上に凡て雨ふらざるべし 十八例へばエジプトの族も上り來らざる時は其上に雨ふらじエホバその 結茅の節を守りに上らざる一切の國人を撃なやます災禍をこれに降したまふべし 十九エジプトの罪凡て 結茅の節を守りに上り來らざる國人の罪是のごとくなるべし 二十その日には馬の鈴にまでエホバに聖しおしるさん又エホバの室の鍋は壇の前の鉢さ等しかるべし 二十一エルサレムあふびエダの鍋は都て萬軍のエホバの聖物となるべし 凡そ犠牲を獻ぐる者は來りてこれを取り其中にて祭肉を煮ん其日には萬軍のエホバの室に最早カナン人あらざるべし

ゼカリヤ書 終

マラキ書

第一章 一これマラキに托てイスラエルに臨めるエホバの言の重負なりニエホバ曰たまふ我汝らを愛したり然るに汝ら云ふ汝何に我儕を愛せしやエホバいふエサウはヤコブの兄に非ずやされど我はヤコブを愛しエサウを惡めり且つわれ彼の山を荒し其嗣業を山犬にあたり 四エドムは我儕はるはされたれども再び荒たる所を建んといふによりて萬軍のエホバ曰たまふ彼等は建んされど我これを倒さん人は彼等を惡境さよび又エホバの恒に怒りたまふ人民と稱へん 五汝らこれを目に云んエホバはイスラエルの地に天なりと云ふは其父を敬ひ 僕はその主を敬ふされば我もし父たらば我を敬ふこと安にあるや我もし主たらば我をおそるること安にあるや 六汝ら我が名を藐視る祭司よ萬軍のエホバいひたまふ然るに汝曹はいふ我儕何に汝の名を藐視りしやと七汝ら汚れたるパンをわが壇の上に獻げ然して言ふ我儕何に爾を汚せしやと汝曹エホバの臺は卑しきなりと云しが故なり 八汝ら盲目なる者を犠牲に獻ぐるは惡に非ずや又跛足なるものと病者を獻ぐるは惡に非ずや 九これを汝の方伯に獻げよされば彼なんちを悦ぶや汝を受納るや萬軍のエホバ之をいふ九請ふ汝ら神にわれらをあはれみ給はんことをもせめよこれら凡て汝らの手になれり彼なんちらを納んや 萬軍のエホバこれを言ふ十汝ら我壇の上にいたづらに火をたくこと無らんために汝らの中一人扉を閉る者あらまほしわれ汝らを悦ばず又なんちらの手より獻物を受じ 十一萬軍のエホバいひたまふ 十二日の出る處より没る處までの列國の中に我名は大ならん 又何處にても香き潔き獻物を我名に獻げんそはわが名列國の中に大なるべければなりと萬軍のエホバいひたまふ 十三いかになんちらちちを愛したりそは汝曹はエホバの臺は汚れたり また其果すなばちその食物は卑しと云ばなり 十三なんちらち又如何に煩勞しきことにあらずやさいひ且これを藐視めたり 萬軍のエホバこれをいふ 又汝らは奪ひし物跛足たる者病める者を携へ來れり 汝らわが獻物を携へ來ればわれ之をなんちらの手より受けんやエホバ之をいひ給へり 十四群の中に牡あるに誓を立て疵あるものをエホバに獻ぐる詐偽者は

マラキ書

第二章

自一至十四節



一 第二節 祭司等よ今この命令なんぢらにあたる二萬軍のエホバはひたたまふ汝等もし聽きしたがはず又これを心にさめず我名に榮光を歸せすばわれ汝らの上に詛を來らせん又なんぢらの祝福を詛はんわれすてに此等を詛へり汝らこれを心にさめざりしに因てなり三視よ我なんぢらのために種をいましめんまた糞すなはち汝らの犧牲の糞を汝らの面の上に撒さん汝らこれささしに携へさられん四わが此命令をなんぢらに下し與ふるは我契約をしてレビに保たしめんためなるを汝ら知るべし萬軍のエホバこれはいふ五わが彼と結びし契約は生命と平安とあり我がこれを彼に與へしは彼に我を畏れしめんが爲なり彼われを懼れわが名の前にをのりけり六眞理の法彼の口に在て不義その口唇にあらす彼平安公義をさりて我と俱にあゆみ又多の人を不義より立歸らせたり七夫れ祭司の口唇に知識を持つべく又人の彼の口より法を諮詢べしそは祭司は萬軍のエホバの使者なればなり八汝らに道法を離れ衆多の人を法に躓穢かせレビの契約を壞りたり萬軍のエホバ之をいふ九汝らに我道を守らず法をおこなふに當りて人に偏りし故に我も汝らに一切の民の前に輕しめられた賤しめられしむ○十我儕の父は皆同一なるにあらずや我らを造りし神は同一なるにあらずや我儕先祖等の契約を破りて各おのれの兄弟にいつはりを行ふは何ぞを造りし神は同一なるにあらずや

十一 ユダは誓約にそむけりイスラエル及びエルサレムの中には憎むべき事行はるすなはちユダはエホバの愛したまふ聖所を褻して他神の女をめされり十二エホバこれをおこなふ人をば主なるものをも事ふる者なんぢらにこれなせり即ち涙と泣きと歎きをもてエホバの壇をおほはしめたり故に彼もはや獻物を願みずまたこれを汝らの手より悦び納たまはざるなり十四汝らはなほ何故ぞやと言ふそは是はエホバ汝らなんぢの若き時の妻の間にいりて證をなしたまへばなり彼はなんぢの伴侶汝が契約をなせし妻なるに汝誓約に背きてこれを棄つ十五エホバは只一を造りたまひしにあらすやされども彼にはなほ靈の餘ありき

何故にひとつのみなりしや是は神を敬虔ふの裔を得んが爲なりき故になんぢら心に謹みその若き時の妻を誓約にそむきて棄るなけれ十六イスラエルの神エホバはひたたまふ我は離縁を惡みまた虐遇をもて其衣を蔽ふ人を惡む故に汝ら誓約にそむきて妻を待遇はざるや用心につとむべし萬軍のエホバこれはいふ○十七なんぢらは言をもてエホバを煩勞はせりされど汝ら言ふ何にわづらはせしやと如何となればなんぢら凡て惡をなすものはエホバの目に善き見えかつ彼に悦ばると言ひまた審判の神は安にあるやさへばなり

一 第三章 一視よ我わが使者を遣さんかれ我面の前に道を備へんまた汝らが求むる所の主すなはち汝らの悦樂ふ契約の使者忽然その殿に來らん視よ彼來らん萬軍のエホバ云たまふ二されど其來る目には誰か堪へ得んやその顯著るる時には誰か立ち得んや彼は金をふきわくる者の火の如く布晒の灰汁の如くならん三かれは銀をふきわけてこれを潔むる者のごさく坐せん彼はレビの裔を潔め金銀の如くかれらなきよめん而して彼等は義をもて獻物をエホバにさしげん四その時ユダとエルサレムの獻物はむかしの日のごさく又先の年のごさくエホバに悦ばれん五われ汝らにちかづきて審判をなし巫術者にむかひ姦淫を行ふ者にむかひ偽の誓をなせる者にむかひ傭人の賃金をかすめ寡婦と孤子をしへたげ異邦人を推枉げ我を畏れざる者ごにもむかひて速に證をなさんと萬軍のエホバ云ひたまふ六それわれエホバは易らざる者なり故にヤコブの子等よ汝らは亡されず七なんぢら其先祖等の日よりこのかたわが律例をばなれてこれを守らざりき我にかへれわれ亦なんぢらに歸らん萬軍のエホバこれを言ふ然るに汝らはわれら何においてかへるべきやと言ひ八ひと神の物をぬすむことをせんやされど汝らはわがものを盗めり汝らは又何において汝の物をぬすみしやさいへり十分の一および獻物に於てなり九汝らは呪詛をもて詛はるまた汝ら一切の國人はわが物をぬすめり十わが殿に食物あらしめんために汝ら什一をすべて我倉にたづさへきたれ而して是をもて我を試みわが天の窓をひらきて容べきまころなきまで之恩澤を汝らにそよぐや否やを見るべし十一萬軍のエホバこれと言ふ十二我また噬食ふ者をなんぢらの爲に抑へてなんぢらの地の産物をやぶらざらしめ



十一 又なんぢらの葡萄の樹をして時のいたらざる前にその實を圃におささざらしめん萬軍のエホバこれはい  
 十二 又萬國の人なんぢらを幸福なる者なきなへんそは汝ら樂しき地となるべければなり萬軍のエホバ  
 十三 これをいふ 十三 エホバ云たまふ汝らは言詞をばけしめて我に逆へりしかるも汝ら我儕なんぢにさ  
 十四 からひて何をいひしやといへり 十四 汝らは言らく神に服事ることば徒然なりわれらその命令をまもりかつ  
 十五 萬軍のエホバの前に悲しみて歩みたりきて何の益あらんや 十五 今われらは驕傲者を幸福なりと稱ふまた  
 十六 惡をおこなふ者も盛になり神を試むるものすらも救はるぞ 十六 その時エホバをおそる者 互に相かむり  
 十七 エホバ耳をいたむけてこれを聽たまへりまたエホバを畏る者およびその名を記憶る者のためにエホバの  
 十八 前に記念の書をかきしるせり 十七 萬軍のエホバいひたまふ我わが設くる日にわれらをもて我實となすべし  
 十九 また人の己につかふる子をあはれむがごとく我彼等をあはれまん 十八 その時汝らは更にまた義者も惡  
 二十 きものと神に服事するものと事へざる者との區別をしらん

第四章 一 萬軍のエホバいひ給ふ視よ爐のごとくに焼る日來らんすべて驕傲者と惡をおこなふ者は藥  
 二 のごとくにならん其來んとする日彼等を焼きつくして根も枝も残らざらしめん二されど我名をおそる者  
 三 汝らには義の日いでて昇らんその翼には醫す能をそなへん汝らは牢よりいでし櫃の如く躍跳ん三又なんぢ  
 四 らは惡人を踐つけん即ちわが設くる日にかれらば汝らの脚の掌の下にありて灰のごとくならん萬軍のエ  
 五 ホバこれを言ふ四なんぢらわが僕 モーセの律法をおぼえよすなはち我がホレブにてイスラエル全體のた  
 六 めに彼に命ぜし法度と誠命をおぼゆべし五視よエホバの大なる畏るべき日の來るまへにわれ預言者エリヤ  
 七 を汝らにつかはさんかれ父の心にその子女を慈はせ子女の心にその父をおもはしめん是は我が來りて詛  
 八 をもて地を撃ことなからんためなり